神戸国際港都建設丸塚特定土地区画整理事業にともなう

丸塚遺跡発掘調査報告書

平成12年３月

兵庫県教育委員会

神戸国際港都建設丸塚特定土地区画整理事業にともなう

丸塚遺跡発掘調査報告書

平成12年３月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は神戸市西区玉津町丸塚字池ノ下他に所在する、丸塚遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、兵庫県教育委員が、神戸市都市整備公社からの依頼を受け、平成８年度から９年度にかけて実施した。

3．調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施し、同事務所職員がこれを担当した。各年度の担当者は以下の通りである。

平成８年度　　久保弘幸　　谷口哲一（山口県派遣職員）
平成９年度　　岸本一宏　　河野喜映（神奈川県派遣職員）

4．本調査は、阪神淡路大震災の復興関連事業として実施され、各年度の調査にあたっては、上記府県からの派遣職員と、兵庫県教育委員会職員が協同してこれを実施した。

5．本書の編集は久保が行い、第１～第３章を久保、第４・６章を岸本が執筆分担した。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と調査の概要
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の概要
１．96年度の調査……1
２．97年度の調査……2
３．整理作業の概要……2

第２章　遺跡をとりまく環境
第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の成果（１）　96年度の調査
第１節　弥生時代の遺構と遺物
１．概　　要……5
２．竪穴住居跡・溝……5
３．柱　　穴……8
第２節　中世の遺構と遺物
１．概　　要……11
２．Ａ地区の掘立柱建物跡および外周施設……11
３．Ｂ地区の掘立柱建物跡および外周施設……12
４．その他の遺構出土の遺物……13
５．包含層出土の遺物……13
第３節　その他の遺物……15
１．須　恵　器
２．石　　器
第４節　ま　と　め

第４章　調査の成果（２）　97年度の調査
第１節　弥生時代の遺構と遺物……17
第２節　中世の遺構と遺物……21

第５章　丸塚遺跡より検出された水田跡の植物珪酸体分析……25

第６章　総　　括
第１節　弥生時代後期……29
第２節　弥生時代後期末～古墳時代初頭……31
第３節　平安時代末～鎌倉時代初頭……32

挿図目次

第1図　柱穴1断面図……8
第2図　包含層出土石器実測図……8
第3図　A・B地区水田畦番号図……18
第4図　中世館跡推定図……24
第5図　水田の植物珪酸体群集……28
第6図　微地形復原図……30

表目次

第1表　丸塚遺跡調査一覧……1
第2表　出土土器観察表（1）……9・10
第3表　出土土器観察表（2）……14
第4表　水田の分析資料……25
第5表　水田の植物珪酸分析結果……26

図版目次

1．遺跡の位置と周辺の遺跡
2．丸塚土地区画整理事業地全体図
3．96年度A地区遺構平面図
4．96年度B地区遺構平面図
5．竪穴住居跡平面／断面図（1）
6．竪穴住居跡平面／断面図（2）
7．竪穴住居跡平面／断面図（3）
8．竪穴住居跡平面／断面図（4）
9．弥生時代の遺物（1）
10．弥生時代の遺物（2）
11．掘立柱建物跡　1平面図
12．掘立柱建物跡　2・3平面図
13．中世の遺物
14．97年度調査区　全体図
15．A地区・B地区平面図（折込）
16．C地区・D地区平面図（折込）
17．足跡拡大図
18．SD－03・04・水田畦畔土層断面図
19．SB－01平面・断面図
20．97年度出土遺物

写真図版目次

1．丸塚遺跡遠景（南から）
　丸塚遺跡遠景（北から）
2．96年度調査区の全景（西から）
　96年度調査区の全景（東から）
　SH－1・2（南から）
3．SH－3・4（南から）
　SH－5（北から）
　SH－6（南から）
4．SH－7（南から）
　SH－7（南から）
　SH－7床面の土器群
5．A地区柱穴1内の土器出土状況
　SB－1全景（東から）
　SB－4全景（北から）
6．97年度調査区全景
7．97年度A～C地区全景
8．A地区水田（西から）
　A地区中央部水田（南東から）
　B地区水田畦畔断面（北から）
9．B地区水田（南東から）
　B地区水田（西から）
　B地区東端水田（北西から）
10．B地区SB－01（南から）
　B地区SB－01（西から）
　B地区SD－01（南から）
11．C地区水田面（白線部分・東から）
　C地区水田畦畔土層断面（北から）
　C地区水田畦畔土層断面（南から）
12．C地区全景（西から）
　C地区SD－04断面（北から）
　D地区全景（東から）
13．96年度出土の遺物（1）
14．96年度出土の遺物（2）
15．96年度出土の遺物（3）
16．97年度出土の遺物
17．プラントオパール分析試料

第１章　調査に至る経緯と調査の概要

第１節　調査に至る経緯

本報告書は、平成８・９年度に兵庫県教育委員会が実施した、丸塚遺跡全面発掘調査の報告書である。

今回実施した調査は、神戸市都市整備公社がおこなう、丸塚特定土地区画整理事業に伴うものである。全面調査は、平成８・９年度に、阪神淡路大震災復興関連事業（住宅地の供給）として、おこなった。

予定地内の埋蔵文化財確認調査は、平成４年度に、神戸市教育委員会による、遺跡の有無を確認するための試掘調査がおこなわれており、事業予定地北部では弥生時代の遺構が検出され、南部では条里遺構存在の可能性が指摘されていた。

平成７年度末には、神戸市教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会が調査を担当するという形で、遺跡の範囲確認調査が、事業予定地北部について実施された。その結果、弥生時代～中世の遺構・遺物が検出されたため、平成８年度に、事業主体である神戸市都市整備公社の委託を受けて、当該部分の全面調査を兵庫県教育委員会が実施した。

事業予定地南部については、平成８年12月に、神戸市教育委員会が主体となり、兵庫県教育委員会が確認調査を実施した。その結果、水田遺構を検出し、その一部については平成９年１～３月に、神戸市教育委員会により全面調査が実施された。平成９年度の調査は、この成果を受けて、前年度に調査を行えなかった範囲について、兵庫県教育委員会が全面調査を実施したものである。

なお、神戸市教育委員会が主体となり、これに兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、人的支援をおこなって実施した調査については、本報告書には収録していない。

第１表　丸塚遺跡調査一覧

調査期間	調査主体	調査の種別	備考
H.5.3.2～3.9	神戸市教育委員会	確認調査	80㎡
H.8.1.30/2.5～3.12	神戸市教育委員会	確認調査	620㎡
H.8.5.13～8.26	兵庫県教育委員会	全面調査	1,538㎡
H.8.12.2～12.20	神戸市教育委員会	確認調査	114㎡
H.9.1.13～1.17	神戸市教育委員会	確認調査	167㎡
H.9.1.20～3.19	神戸市教育委員会	確認調査・全面調査	2,500㎡
H.9.6.23～9.2	兵庫県教育委員会	全面調査	864㎡
H.9.8.20～9.2	神戸市教育委員会	全面調査	163㎡

第２節　調査の概要

（１）　平成８年度の調査

平成８年度の調査は、丸塚遺跡の北部に当たる、字池の下地区で行われた。調査範囲は丸塚特定土地区画整理事業用地内における、道路敷部分1,538㎡である。調査は、神戸市都市整備公社の依頼を受け、平成７年度にトレンチによる確認調査を、８年度に全面調査を（神整公開第79号　平成８年３月11日により）実施したものである。調査の担当者及び組織は、以下の通りである。

確認調査（平成７年度）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

復興調査班長　　山　本　三　郎

復興調査班　　兼　康　保　明（滋賀県派遣職員）

　　谷　口　哲　一（山口県派遣職員）

全面調査（平成８年度）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

復興調査第１班長　　小　川　良　太

復興調査第２班長　　山　本　三　郎

復興調査第１班　　久　保　弘　幸

復興調査第２班　　谷　口　哲　一（山口県派遣職員）

全面調査は、平成８年５月13日から同年８月26日にかけて実施した。調査区内に延びている水路を維持するため、調査区をＡ・Ｂ２地区に分割して順次調査をおこなったが、この水路付近を境として、遺構の状況にかなりの変化が認められた。

調査は、耕作土を重機掘削によって除去した後、人力による遺物包含層の掘削および遺構の検出をおこなった。調査の記録は、国土座標を基準として図化をおこなっている。

（２）　平成９年度の調査

平成９年度の調査は、前年度に全面調査を実施できなかった、事業予定地南部の道路予定地部分について実施した。調査担当者は下の通りである。

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

復興調査第１班長　　小　川　良　太

復興調査第１班　　河　野　喜　映（神奈川県派遣職員）

　　岸　本　一　宏

調査区が分散していたため、全面調査にあたり、北より順に、Ａ～Ｄ地区と仮称した。調査は、耕作土を重機掘削によって除去した後、人力による遺物包含層の掘削および遺構の検出をおこなった。調査の記録は、国土座標を基準として図化をおこなっている。

調査の結果、弥生時代末～古墳時代初頭の水田跡を、Ａ・Ｂ・Ｄ地区で検出し、Ｃ地区でも水田層を確認した。また中世の遺構面は、Ｂ～Ｄ地区で検出し、Ａ地区脇でも確認した。また、Ａ～Ｄ地区で検出された中世の溝が、これまでの確認調査の成果等をあわせて、中世の館跡の外周を画する、概ね方形に巡る溝であることが推定された。

なお、本報告書の作成に関する出土遺物の整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、平成11年度に実施した。

第2章　遺跡をとりまく環境

第1節　地理的環境

丸塚遺跡は、明石川支流、櫨谷川の西岸にひろがる沖積微高地面上に立地しており、標高は12～15mを測る。現在の地形図で微地形を復元してみると、調査地の南東に南北に連なる、現丸塚集落と概ね重複するように、南北方向に延びる自然堤防状の高まりが認められる。その北西に位置する平成8年度の調査区付近には、東から西に延びる微高地が認められる。その南側には、やはり東から西に延びる小規模な谷が存在する。こうしたことから櫨谷川は、微高地形成時においては、現在より北よりの位置を、西に向かって流下していたものと考えられる。

平成8年度の調査区は、自然堤防と考えられる埋没微高地の南縁に沿っている。調査区の西部を水路が横断していたため、便宜的に西側をA地区、東側をB地区と呼称したが、ちょうど水路を境として、西側は埋没谷となる。また、B地区の東半は、やはり低地となる。

調査の結果、B地区の東半は、弥生時代後期の旧河道であることが確認されたので、弥生時代後期の時点では、調査区周辺にはまだ起伏がよく残っていたのであろう。その後凹地が次第に埋没して平坦化していったものと思われる。

中世前半期（12世紀）の遺構は、B地区の埋没微高地上にとどまっており、A地区に見られる遺構はこれよりやや新しいものであることから、中世前半の段階では、依然として地形の起伏が残っていたのかもしれない。またA地区では、遺構検出面下に砂礫層の堆積が認められたことから、凹地が埋没する段階で、ある程度規模の大きな洪水が影響していることが明らかである。

弥生時代の遺構が立地する微高地は、30～50mの幅をもち、概ね東北東から西南西の方向に延びている。微高地の延長は明瞭ではないが、少なくとも150m以上にわたっていることから、弥生時代集落が立地可能な面積は、6,000㎡以上に達するものと思われる。

平成9年度の全面調査地は、8年度調査地の南に位置し、上述の現丸塚集落が立地する微高地と、平成8年度調査区に沿った微高地に挟まれた凹地部に相当する。調査の結果、弥生時代の水田跡および中世館跡が検出され、弥生時代における湿地部の存在と、以降、中世にかけての凹地の埋没―平坦化が検証された。

以上のような成果から、丸塚遺跡周辺の地形は、北側から微高地が形成され、弥生時代以降、次第に南側の凹地が埋没するという過程を経て現在にいたったものとしてよかろう。凹地が平坦化するにしたがって、集落域が南へ拡大し、水田の領域も変化したに違いない。なお平成8年度の調査で、後期旧石器時代のナイフ形石器が出土しているが、該当時期の層準は、今回の調査地付近では、相当な深度にあって、調査深度内では検出されなかったことから、むしろ調査地の北200mに広がる、更新世の段丘との関連を考えたほうがよいかもしれない。

第2節　歴史的環境

丸塚遺跡周辺は、明石川およびその支流が形成した微高地、段丘面が分布し、多数の遺跡が立地することが知られている。（図版1）

後期旧石器時代の遺跡は、丸塚遺跡の北方に広がる更新世の段丘で、数ヶ所の散布地が知られている

が、発掘調査例はない。丸塚北方約９㎞にある金棒池では、多数のナイフ形石器等が採集されており、注目される。丸塚遺跡付近では、当該時期の生活面は、沖積平地の堆積下に埋没している可能性が高く、これまでに調査された例はないが、今後の調査にあっては、注意が必要であろう。

縄文時代の遺跡で、規模の大きなものは知られていない。縄文時代初頭の遺物としては、先述の金棒池採集の有舌尖頭器があげられる程度である。前期～中期の遺跡も希薄であるが、後期以降には集落が形成されたようである。同じ明石川支流である伊川流域の長坂遺跡、南別府遺跡、明石川本流域の玉津田中遺跡、印路遺跡、大畑遺跡、西戸田遺跡などでは、後期～晩期の遺物が出土している。

丸塚遺跡の北西1.5㎞に位置する玉津田中遺跡では、縄文時代後期～晩期の土器が出土しているが、住居跡等は検出されていない。

明石川流域で最も古く成立する弥生時代の遺跡としては、丸塚遺跡の南西２㎞にある吉田遺跡が著名である。これと概ね同時期ないしやや遅れて、玉津田中遺跡、新方遺跡が成立する。両遺跡とも、以後弥生時代を通じての拠点的集落として知られている。丸塚遺跡の南２㎞に位置する新方遺跡は、近年弥生時代前期の人骨を出土したことで話題となった。中期には、玉津田中・新方遺跡では竪穴住居跡・方形周溝墓が形成されているが、特に玉津田中遺跡では、発掘調査により居住域・墓域・水田域の広がりと変遷がとらえられたほか、木製農具・蛸壺など、生業の復元を可能とする資料が蓄積されている。さらに、方形周溝墓群に近接した地点で、土器群と大規模な焼土を伴った長方形の基壇状祭祀遺構が検出されていることが注目される。

中期後半には、丸塚遺跡と同じ櫨谷川流域の青谷遺跡をはじめ、西神ニュータウン内の遺跡群（第48・50・59・62地点）、伊川流域の頭高山遺跡、池上口ノ上遺跡など多数の高地性集落が成立する。これらの多くは後期にはいると途絶しており、集落をめぐる社会的環境の変化が推測される。また近年調査され、小型鏡を出土した表山遺跡は、後期初頭の堀を巡らせる高地性集落として注目される。

後期の集落は、明石川流域に多く分布しており、先述の玉津田中・新方遺跡の他、吉田南、高津橋・岡遺跡などが知られている。丸塚遺跡の弥生時代後期～古墳時代初頭の集落は、こうした集落形成の延長に位置するものだろう。

古墳時代の集落としては、吉田南、池上口ノ池遺跡が知られる。ともに規模の大きな集落で、特に吉田南遺跡では、前期～後期にかけて合計100棟を超える竪穴住居跡が検出されているという。古墳時代中期以降に成立した拠点的集落としては、出合遺跡が知られている。

明石川流域の古墳としては、最も古いとされる天王山４・５号墳（長方形墳）が４世紀前半に、白水瓢塚古墳（前方後円墳）が同後半に成立したとされる。これらは伊川流域に立地しているが、明石川本流域には、有力な前期古墳は知られていない。

中期には、周濠を巡らせる前方後円墳（陵墓参考地）である吉田王塚古墳が成立する。王塚古墳は明石川流域最大の古墳である。

後期には各地に群集墳が成立する。その多くは木棺直葬墳で、横穴式石室は少数である。

律令期の遺跡としては、先述の吉田南遺跡が代表的であろう。奈良時代後半から平安時代前半の掘立柱建物跡が多数検出されたほか、木簡・墨書土器・陶硯・帯金具などを出土し、明石郡衙と推定される。

中世の集落としては、先述の玉津田中遺跡をはじめ、福中城・枝吉城など室町時代の居館跡が知られている。また、玉津田中遺跡では、鍛冶遺構・池状遺構・堀などが検出されている。丸塚北方の段丘奥には、東播系須恵器の生産拠点である神出窯跡群が立地し、数次にわたる調査によって、播磨地域の中世須恵器編年の基準となる資料が出土している。

第３章　調査の成果（１）　平成８年度の調査

第１節　弥生時代の遺構と遺物

１．概　　要

今回調査された弥生時代の遺構・遺物は、大きく２期に分けられる。第１期は、弥生時代後期半ばを中心とする時期で、第２期は弥生時代終末期にあたる。検出された遺構は、竪穴住居跡７棟、円形周溝遺構１基のほか、溝・土坑・柱穴等である。ただしすべての遺構について、細かな時期を特定できたわけではない。以下では各遺構と出土遺物の記載をおこなう。なお、遺物の計測値は、観察表に一括する。

２．竪穴住居跡・溝

SH－１・SH－２（図版５・写真図版２）　SH－１は、やや歪んだ円形の住居跡である。SH－２と重複しているため、一部遺存していない部分があるが、直径は6.0m前後、床面積は約28.3㎡で、主柱穴は５本である。住居跡のほぼ中心に、不整形な土坑１基が設けられている。中央土坑内からは、口縁部を欠く甕が出土した（図版９－６）。中央土坑に接して、住居跡中央部が長径約1.8m、短径約1.5mの範囲で床面から10㎝ほど掘りくぼめられている。

断面観察からは、住居跡は自然埋没したものと思われる。

図版９－１は、壺の口縁部であろう。口縁部を肥厚させ、外傾する端部を作出して、ここに擬凹線を施している。頸部以下は遺存していないが、わずかに縦方向のハケ調整の痕跡をとどめる。

２～６は甕である。６は中央土坑から、他は住居跡埋土からの出土である。

２は口縁部の開きが小さい、小型の甕である。体部中央までしか遺存していないが、球形に近い体部をもつものであろう。内面に横方向のハケ調整を施すが、外面は風化が著しい。

３・４はくの字形に屈曲する頸部をもつ。３は外面に右上がりのタタキが認められる。４は口縁端部をわずかに上方にむけて終わらせている。体部は球形を呈し、外面は縦方向のハケ調整を、内面はヘラケズリを施す。

５は口縁部の一部をとどめるのみである。外面にわずかに右上がりのタタキが観察される。

６は、中央土坑より出土した、甕の体部である。体部下半は右上がりのタタキが施され、体部中央から上半は、横方向のタタキが観察される。内面は横方向のハケ調整が施される。

７は中央土坑より出土した鉢である。わずかに膨らみをもつ体部は、外上方に開いて口縁部に至る。外面に右上がりのタタキが施され、内面は縦方向のハケ調整が施される。

10～13は壺・甕ないし鉢の底部である。11の外面は、右下がりのタタキが施されている。

SH－２は方形住居跡である。SH－１の北半に重複し、全体の１/２弱が調査区外にある。一辺は約5.4m、床面積は約29.2㎡である。周溝は東辺のみ明瞭に検出されたが、これはむしろSH－１との重複による、検出の困難さに起因するものであって、本来は完周していた可能性が高い。

住居内東寄りの位置には、壁沿いの周溝から0.9mほど内側に平行する溝１条が見られる。また相対する西側では、東側ほど鮮明ではないが、住居床面に溝の痕跡が認められた。こうしたことから、SH－２は、本来二重の周溝と、これに挟まれた、幅１m前後の、いわゆるベッド状遺構をもっていた可能性が高い。

また住居の西辺には、壁に接して杭の痕跡と思われる小柱穴が連なっており、12基まで確認された。これは住居跡壁面における、構造物の存在を想起させる。

図版９－８・９、14～16は、いずれもSH－２埋土より出土した。

９は壺の体部である。大きく膨らむ体部の下半は、ヘラケズリが施される。

８は受口状の口縁部をもつ甕である。口縁端部を上方にのばし、ほぼ直立する口縁外面には２条の擬凹線を施している。体部外面は、縦方向のハケ調整が認められる。

14は短い脚をもつ小型の甕である。体部の膨らみは小さく、頸部は緩やかに屈曲して口縁部に至る。体部外面には縦方向のハケ調整が、内面には横方向のハケ調整が施される。

SH－３・SH－４（図版６・写真図版３） SH－３は、円形住居であろう。その大部分が調査区外にあるため、明示できる内容がほとんどない。周溝が多重である可能性が高いことから、複数の住居が重複しているものと思われる。

SH－４は方形住居である。SH－３に重複するが、やはり大部分が調査区外にあるため、内容は明らかではない。東側コーナーが中世の溝により破壊されているが、一辺は4.3m前後、床面積は約18.5㎡と推定される。周溝は検出されなかった。

SH－３・４からは、図示できる遺物は出土していない。

SH－５（図版７・写真図版３） SH－５は２重の周溝を巡らせる方形住居跡である。全体の１/２以上が調査区外にあり、１コーナーが検出できたのみであることから、規模は不明である。主柱穴が、内側の周溝のコーナー部で検出されており、４本柱をもつものと思われる。

内側の周溝は、外側の周溝とほぼ１mの間隔を保って巡らされている。したがって、SH－５は、SH－２と概ね同様の規格をもっていたものと考えられる。ただ、遺存状況は劣悪で、周溝も断続的であったため遺物は、周溝内より少数の土器細片が出土したのみであり、詳細は論じがたい。

SH－５の外周には、円形周溝遺構SD－３が巡っている。SH－５・SD－３ともに出土遺物が僅少であることも相まって、両者の関係は明らかではない。しかしSH－５が、SH－２と同一の規格をもつことから、両者が同時期であるという推定には、それほどの無理はあるまい。SD－３はSH－７を破壊しているが、SH－２は出土した土器から、SH－７より古い段階に属すると判断できる。したがって、SD－３はSH－５よりも新しいものと思われ、両者は直接の関連性をもたないと結論しておきたい。

SH－６（図版６・写真図版３） SH－６は、ごく小規模な隅丸長方形の竪穴遺構で、長辺3.2m、短辺2.6m、床面積は約8.3㎡を測る。周溝は北辺で２条に、他の辺では１条を設けるものの、床面には柱穴をもたない。顕著な出土遺物もなく、詳細な時期を特定することはできないが、SH－７と近似した平面形をなし、隣接していることから、SH－７との関連が推察される。

SH－７（図版８・写真図版４） SH－７は、主柱穴２本をもつ隅丸長方形の住居跡である。住居跡のほぼ中央に、直径50cm、深さ20cm前後の中央土坑を設けている。北辺の周溝のほぼ中間から、中央土坑を通り南辺の周溝に至り、さらに住居跡外へ延びる排水溝を設けている。排水溝が住居外へ延びる部分は、一部が直径30cm前後の暗渠となっている。その規模から見て、素掘りの状態では維持し難いものと思われ、暗渠構築時点では、なんらかの排水管が埋設されていた可能性が推察されたが、調査時に、断面等でその痕跡を確認することはできなかった。

なお、SH－７の南西隅と住居内から延びる排水溝は、SD－３によって破壊されている。したがってSD－３は、SH－７より新しい時期に掘削されたことが明らかである。

SH－７の床面からは、土器群が検出された。土器群に属する個体の多くが床面に密着しており、住居廃絶に近接した時期のものと考えてよかろう。土器群中に完形を保つ例がないこともふまえて、想像をたくましくするならば、住居廃絶直後に廃棄された可能性が高い。

また周溝内からも、完形の鉢２点が出土している。

図版10－17～24は、SH－７床面の土器群に含まれた資料である。

17は体部の膨らみが小さい甕である。くの字形に屈曲する頸部から、大きく開く口縁部を見せる。体部外面は右上がりのタタキの後、縦方向のハケ調整が施されている。体部内面は縦方向のハケ調整が、また口縁部内面は横方向のハケ調整が認められる。

18は体部上半に最大胴径をもつ甕である。くの字形に強く屈折する頸部を見せ、口縁端部は上方につまみ上げられて、外傾に直立する面を形成している。風化のため観察には困難を伴うが、体部外面は横方向のタタキが、内面は横方向のハケ調整が施される。

21は叩きを施す、甕の底部である。

23は退化した長頸壺の口縁部であろう。風化のため器面の観察は困難で、内面にわずかに横方向のハケ調整を認めるのみである。

20・22は壺の底部である。

19・24は高坏である。19は、屈折して強く外反しながら開く坏部を見せる。内外面とも丁寧なヘラミガキが施され、外面にはヘラ描きの複合鋸歯文が、交互に天地を違えながら飾られている。外面屈折部には、２条の凹線が巡り、S字形の浮文が装飾される。

24は皿状の坏部をもつ、小型の高坏である。脚部と口縁端部を欠く。

25～27は周溝内より出土した鉢である。いずれも緩やかに膨らむ体部をもつ。25では口縁部がわずかに外反し、26では概ね垂直におわる口縁部を見せる。指押さえの痕跡が顕著であることと、小型であることから、いわゆる手捏ねの土器であろう。

SD－３（図版７・写真図版３） SD－３は、SH－５を囲むように掘り込まれた、円形周溝遺構である。調査区外に約１/２があると推定され、今回の調査では半円形の部分を調査できたにすぎない。このため全体の内容は不明である。仮にSD－３が完周するものであれば、歪んだ楕円形と推測され、長径は12～13mであろう。

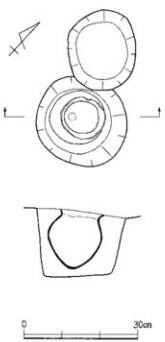
東側１/３ほどで、２条の溝が重なるような断面形を示すが、複数の遺構が重複した状況は看取されず、本来の掘削形がこうした形態であったものと判断された。堆積物は黒色の極細砂を主体としており、自然埋没の状況を示していた。

溝内からの出土遺物は僅少で、図示できるものはわずかに２点である。

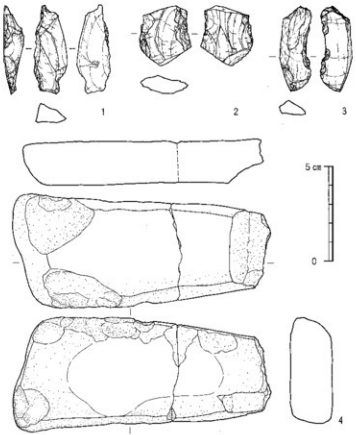
図版９－29は、小型の甕ないし鉢の脚である。風化のため、器表面には調整痕をとどめていない。

30は甕の底部である。外面にわずかにタタキの痕跡をとどめるが、やはり風化が著しい。

遺構の重複状況から、SH－７より新しく、所属時期は弥生時代終末としてよかろうが、遺構の性格についての結論は、留保せざるを得ない。 円形周溝墓等の可能性も考慮しなければなるまいが、結論は留保しておきたい。



第１図　柱穴平面・断面図



第２図　包含層出土石器実測図

３．柱　　穴

竪穴住居跡に属さない弥生時代の柱穴は、調査時点においては、埋土の相違により中世の柱穴と識別した。しかし、場合によっては両者の埋土が類似しており、完全な識別はおこないえなかった。

大部分の柱穴では、建物等を復元するに至らなかったが、A地区東部で、柱穴３基が直線上に並ぶ状況を確認した。柱穴３基中２基には、浅い柱穴が付属している。この柱穴群は、掘立柱式の建物跡の１辺と思われるが、調査区内では相対する柱穴列は検出されていない。

柱穴のうち１基には、弥生時代後期後半に属する甕１個体が、底部を下にしてやや傾斜した状況で埋設されていた（第１図・写真図版５）。遺構検出作業および土器取り上げの際、口縁部と底部の一部を破損してしまったが、ほぼ完形であったろう。甕の最大径は柱穴の径に近く、埋設がきわめて企画性の高いものであったことを示唆している。他の柱穴では、特に注意される遺物の出土は見られなかった。

甕の大きさから、土器棺の可能性は低いと考えられる。

図版10－28は、柱穴出土の甕である。口縁部はくの字形に屈曲して開き端部に至る。体部は丸みを帯び、最大胴径は、器高の１/２よりやや上位に認められる。体部外面には、右上がりのタタキが施されるが、体部下半と上半ではその斜度が大きく異なり、分割成形の顕著な表象となっている。体部内面は、縦方向のハケ調整が施されるが、やはり上半と下半でその方向が異なっている。

第2表　出土土器観察表　(1)－1

遺構　SH－1				図版9	
番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	整形・調整	器形・装飾の特徴
1	埋土	壺？ 口縁部	口径 19.9	外面　縦ハケ	口縁部が肥厚 口縁外面に擬凹線
2	埋土	甕	口径 10.3	内面　横ハケ	
3	埋土	甕	口径 17.2	外面　タタキの後縦ハケ	
4	埋土	甕	口径 16.8　腹径 22.6	外面　縦ハケ 内面　ヘラケズリ	球形の体部 口縁外面に小さな面をもつ
5	埋土	甕	口径 22.7	外面　タタキ 口縁内面　横ハケ	口縁端部に面をもつ
6	中央土坑	甕	腹径 17.6　底径 4.5	外面　タタキの後上部に縦ハケ 内面　横ハケ	最大胴径は器高の1/2程度の位置
7	埋土	鉢	口径 19.3　底径 4.3 器高 8.6	外面　タタキ 内面　縦ハケ	
10	埋土	壺底部	底径 4.5		
11	埋土	甕底部	底径 5.4	外面　指押さえ 内面　横ハケ	
12	埋土	甕底部	底径 4.5	外面　タタキ	
13	埋土	甕底部	底径 3.7	外面　タタキ 内面　縦ハケ	

遺構　SH－2				図版9	
番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	整形・調整	器形・装飾の特徴
8	埋土	甕	口径 16.0	外面　縦ハケ	口縁外面に擬凹線
9	埋土	壺	腹径 19.5　底径 7.2		
14	埋土	甕	口径 10.0　底径 5.1 器高 12.8	底部外面　指押さえ 外面　縦ハケ 内面　縦ハケ	体部の膨らみの小さい台付甕
15	埋土	壺底部	底径 4.0	底部外面　指押さえ 内面　縦ハケ	
16	埋土	甕底部	底径 4.7	外面　タタキの後縦ハケ	

遺構　SD－3				図版9	
番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	整形・調整	器形・装飾の特徴
29	埋土	？ 脚	底径 8.0	風化のため不明	八の字形に開く脚
30	埋土	甕 底部	底径 4.7	外面　タタキの後横なで 内面　横ハケ	

遺構　SH－7				図版10	
番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	整形・調整	器形・装飾の特徴
17	床面 土器群	甕		外面　タタキの後縦ハケ 口縁内面　横ハケ	緩やかな屈曲の頸部から膨らみの小さい体部
18	床面 土器群	甕	口径 11.2	外面　タタキ 内面　横ハケ	頸部が強く屈曲する、受口状口縁部 口縁部外面に面を形成
19	床面 土器群	高坏 坏部	口径 18.5	外面　S字状浮文・複合鋸歯文 内外面　ヘラミガキ	口縁部は屈折して外反する 鋸歯文は交互に天地を違える

第２表　出土土器観察表　（１）－２

遺構　SH－７					図版10
番号	出土位置	器種	計測値（cm）	整形・調整	器形・装飾の特徴
20	床面 土器群	壺 底部	底径 3.9	外面　ヘラミガキ？ 内面　横ハケ	
21	床面 土器群	甕 底部	底径 3.8	底部外面　指押さえ・タタキ 内面　縦ハケ	
22	床面 土器群	壺 底部	底径 1.6	外面　ヘラミガキ 内面　縦ハケ	径の小さい底部から、大きく開く体部が立ち上がる
23	床面 土器群	壺 口縁部	口径 14.5	内面　横ハケ	緩やかに屈曲する長い頸部をもつ
24	床面 土器群	高坏		外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	
25	SA－１ 柱穴３	鉢	口径 9.0　底径 3.2 器高 6.2	外面　縦ナデ（板状工具） 底部外面　指押さえ	体部の膨らみは小さい口縁部をわずかに外反させる
26	周溝	鉢	口径 10.4　底径 4.1 器高 6.8	外面　ヘラミガキ	膨らみをもつ体部から、そのまま口縁部に至る
27	埋土	鉢？ 底部	底径 3.3	底部外面　指押さえ	
遺構　柱穴					図版９
番号	出土位置	器種	計測値（cm）	整形・調整	器形・装飾の特徴
28	柱穴内	甕	口径 12.4　底径 3.0 器高 17.5	外面　タタキ 内面　縦ハケ	体部中央でタタキ・ハケの方向を異にする分割成形
包含層出土の遺物					図版10
番号	出土位置	器種	計測値（cm）	整形・調整	器形・装飾の特徴
31	トレンチ 砂礫層	壺	口径 13.9	外面　ヘラミガキ 口縁内面　ヘラミガキ	口縁端部を拡張し外面に１条の凹線を施す
32	トレンチ 砂礫層	壺	口径 14.7	外面　ヘラミガキ 口縁内面　ヘラミガキ	LJ縁部を下方に拡張し、３条の凹線を施す
33	トレンチ 砂礫層	壺	口径 18.3	風化のため不明	膨らみをもつ頸部から、大きく外反して開く口縁部をもつ口縁部を下方に拡張し４条の凹線と竹管文付円形浮文を施す
34	トレンチ 砂礫層	甕	口径 13.8	外面　縦ハケ 内面　ヘラケズリ	口縁部の外反は弱い。口縁端部には平坦な面を形成する
35	トレンチ 砂礫層	甕	口径 14.4	外面　タタキ 内面　ヘラケズリ	口縁端部に平坦な面を形成する
36	包含層下層	甕	口径 13.0	風化のため不明	頸部は強く屈曲する
37	包含層下層	甕	口径 15.6	外面　縦ハケ 内面　ヘラケズリ	強く屈曲する頸部と、やや外反するLJ縁部をもつ
38	トレンチ 砂礫層	台付鉢	口径 10.4　底径 5.2 器高 5.1	外面　指押さえ 内面　ハケ	直線的な短い脚台と、丸みを帯びた体部を見せる
39	包含層上層	甑	底径 1.3	外面　指押さえ	孔は１個 尖底状の底部から、急斜度で体部が立ち上がる
40	包含層下層	鉢？	底径 4.0	外面　指押さえ	手捏ねの小型土器
41	砂礫層	鉢	口径 6.5　底径 3.6 器高 5.5	内外面とも指押さえ	手捏ねの小型土器
42	A地区湿地部包含層	須恵器 杯　蓋	口径 10.6　器高 3.2	天井部　ヘラケズリ	口縁部を外反させる LJ縁部と天井部の稜は弱い
43	A地区湿地部包含層	須恵器 杯　蓋	口径 15.2　器高 4.0	天井部　ヘラケズリ	口縁部から天井部へは、なだらかに移行する
44	A地区湿地部包含層	須恵器 杯　身		底部　ヘラケズリ	

第２節　中世の遺構と遺物

１．概　　要

丸塚遺跡で出土した中世の遺物は、２時期に大別できる。第１期は12世紀末～13世紀前半を中心とする時期であり、第２期は14～15世紀を中心とした時期である。しかし大部分の遺物が包含層からの出土であり、遺構内からの出土遺物が僅少であることから、必ずしもすべての遺構の時期を特定できるわけではない。包含層出土遺物が、ある程度参考となるのであれば、Ｂ地区の遺構群は概ね第１期に、Ａ地区の遺構はこれよりやや新しい時期に属すると思われる。検出された遺構は、掘立柱建物跡４棟と、これに附属する溝・土坑・柵である。遺物の記載は、観察表に一括する。

２．Ａ地区の掘立柱建物跡および附属の遺構と遺物

SB－３（図版12　写真図版２）SB－３はＡ地区の東半に位置する。建物跡の大半が調査区外にあるためと、やはり柱穴の遺存状況が不良であるため、建物跡の復原には至らなかった。建物跡の南には、湿地性の堆積物が広がっている。

SD－２は、SB－３の外周施設であろう。SD－１に比べて幅は約１/２で、断面形はU字形を呈する。SD－２の西に1.5mほど離れて、SK－２が位置する。東西に長軸をもつ、長方形状の土坑である。SB－２関連遺構の出土遺物は、いずれも細片で、図示しうるものがない。

SB－４（図版３　写真図版２）SB－４は、Ａ地区西半に位置する。多数の柱穴が溝に区画された範囲に密集していることから、掘立柱建物跡と考えたが、建物跡の復原には至らなかった。調査区の西端が30cm程度の段差をもって低くなるため、遺存していない柱穴があるものと推測される。区画内での柱穴の密度が高いことから、複数時期の建物跡が重複している可能性が高い。柱穴内の遺物はいずれも細片で、図示し得ない。

建物跡を取り囲む溝（SD－１）については、北東角を検出したが、全体規模は不明である。全体に、浅い皿状の断面形を示す溝である。開墾により段化された調査区で、溝は途絶するが、調査区北西隅の断面で、かろうじてその痕跡を識別することができた。その状況から見るならば、SD－１北東角は、やや鈍角気味に屈折しているようである。溝内の堆積物は、砂を主体とする粗粒のもので、自然堆積を示す。溝内からは、多数の炊飯・食器関係の遺物が出土しているが、図示しうるものがない。

SK－１　SK－１は、SD－１の北東角近くの外側に附属する。この部分では、SD－１自体が分岐して北にのびるようにも見えるため、SK－１は本来独立した土坑ではなく、SD－１の一部であった可能性も否定できない。しかし、SD－１の底面より深く掘り下げられ、独立した平面形をもつことから、ここでは土坑として取り扱う。いずれにせよ、出土遺物からは、SD－１と同時期の遺構としてよい。

SK－１の平面形は、歪んだ瓢形を呈する。長軸88cm、短軸80cm、深さは20cmである。堆積物は、SD－１同様単純な自然埋没を示している。

SB－４およびその周辺の遺構は、黄褐色ないし灰褐色を呈する粗砂ないし砂礫層で被覆されており、遺構群の埋没に際して、ある程度の規模の洪水が関与したものと思われる。

SB－４および周辺遺構群からの出土遺物は、細片が多く、図示しうるものは少数である。ここではSK－１から出土した土師質羽釜を記載する（図版13－45・46）。

45は最大径が底部と体部の境界付近にあり、やや扁平な感をうける形態を呈する。底部は欠損してい

るが、底部付近の器壁は薄く、口縁部に近づくにしたがって厚みを増す。体部は内傾しつつたちあがり、口縁端部には内傾する面を形成している。口縁部直下に断面三角形の鍔を貼付ている。外面は右上がりのタタキ整形が施されている。また外面には煤の付着が著しい。

46も45とほぼ同様の形態を示すものであろう。口縁部のみの破片であるため、詳細は不明である。体部には、右上がりのタタキをわずかにとどめる。

3．B地区の掘立柱建物跡および附属の遺構と遺物

SB－1　（図版11　写真図版2）SB－1はB地区西部に位置する。建物跡のほとんどは調査区外にあり、調査区内では、わずかに建物跡の南辺の柱穴をとらえられたのみである。南辺の柱穴は6間分であるが、直線に並ばず、途中で屈折する。従って南辺3～5間と1～2間の、2棟の建物跡に分離できるかもしれないが、詳細は不明といわざるを得ない。柱間は2.0m～2.4mである。

SB－1の南縁には、柵と考えられる柱穴列が検出された（SA－1）。また、SB－3内から延びる溝（SD－3）が、溜池状遺構に接続しており、これらが、相互に関連する遺構群と思われる。

SA－1　SA－1は、SB－3の外周柵と思われる。SB－3南辺の柱穴と平行に、建物跡の柱穴より小型の柱穴列が、東西14mにわたってのび、東側で直角において調査区外へとのびる。柱穴列は一見無秩序のように見えるが、詳細に観察すると、柱間0.8から1.2m前後を示し、南辺の東側約1/3では、柵が重複しているようである。またSD－3付近で、分岐して北へのびる列があるようにも見えるので、これを模様とすれば、SB－3は南辺3間と2間の、2棟に分離できることになる。

SA－1の西端に位置する柱穴3からは、須恵器鉢（図版13－50）・白磁椀の破片が出土している。

50はいわゆる東播系須恵器の鉢である。直線的に開く体部から、玉縁状に外方へ拡張する口縁部をみせる。口縁端部はまるみをおびた面となる。

SD－3　SD－3は、SB－1を北から南へ横断し、溜池状遺構に接する溝である。SB－1との関連は、溝・掘立柱建物跡ともに調査区外に広がるため、不明であるが、次に述べる溜池状遺構とともに、SB－1の排水に関連する可能性がある。埋土中からは、須恵器鉢（47）等、中世前半期の遺物が出土している。

47は東播系須恵器の鉢である。体部は直線的に開き、口縁部は上下に拡張されて、端部にまるみをおびた面を形成する。

溜池状遺構　B地区西部に位置する。南半が調査区外にあるため、全体の形状は不明であるが、北半の形状から推察するならば、概ね楕円を呈するものと思われる。長径は約4.5m、検出面からの深さは1.5mを測る。砂質シルトを主体とする堆積物で自然埋没しており、埋土中からはやはり中世前半期に属する細片の遺物が少数出土した。SB－1と同時期の遺構と考えられる。

SK－2　SK－2はSD－3の北側に接している。不整四辺形を呈し、長辺約2m、短辺0.7mを測る。埋土中より須恵器鉢（48）が出土している（図版13　写真図版15）。

48は口縁部のみの破片である。端部は外方に拡張され、まるみをもちつつも、凹凸のある面を形成している。

SB－2　（図版12　写真図版2）SB－2は、B地区の中央で検出された。やはり建物跡の多くの部分が調査区外にあるため、検出できたのは東西2間、南北3間までで、全体の規模は不明である。柱間は、1.1～2.7mを測る。

SA－2　SB－2は外周施設として、柵を巡らせている（SA－2）。SB－2の南辺と平行に、東西約

8mにわたり柱穴列が検出されており、その柱間は0.7～1.2mを測る。建物跡東辺にも小型の柱穴が散漫に見られるが、柵を復元するには至らなかった。また、SB－2の東側に検出された、幅15cm前後の屈折する溝は、建物跡に付属するものか否か判断できなかった。

4．その他の遺構出土の遺物（図版13）

49は弥生時代の円形周溝遺構（SD－3）上面を精査中に出土した、須恵器椀底部である。円形周溝は、SA－1の柱穴と重複しているので、こうした出土状況も首肯できる。底部を糸切りし、底部と体部の境界は比較的明瞭であるが、高台の作出はまったく認められず、内底面のくぼみも認められない。

5．包含層出土の遺物（図版13　51～73）

A・B両地区ともに、包含層からは多数の遺物が出土している。中世の遺物は、大略中世前半期と後半期の遺物に分離できる。いずれの時期の遺物も、釜・椀・鉢等、生活関連遺物が主体であり、調査地周辺における当該時期の集落の広がりを示している（第3表）。

51は土師質小皿である。平坦な底部から強く屈折して、直線的に立ち上がる体部をみせる。

52は体部中央より上部を欠くため、形状は判然としない。体部が内彎しつつ立ち上がることから、小型の鉢ないし壺であろうかと推定しておく。

53は椀の底部である。

54～57は、土師質羽釜である。断面三角形の鍔を口縁部下に貼付しているが、いずれも鍔は退化形態を示している。口縁部が肥厚する傾向と、端部に内傾する面を形成する傾向も共通しており、また、端部をわずかに外上方につまみ出すもの（55・56）も認められる。体部の整形はタタキ、内面調整は横方向のハケ施されている（55・56）。

58～60は、やはり土師質の羽釜であるが、鍔はいっそう形骸化し、口縁下にわずかに断面三角形の隆起が見られる程度にとどまる。鍔は、概ね指押さえと横ナデにより形成されているようで、粘土帯貼付の痕跡は、判然としない。54～57の例よりも、体部の立ち上がりが急斜となる傾向が見られる。口縁部が肥厚して、内傾する面を形成する傾向は共通しているが、端部が外上方につまみ出される傾向が強い。体部外面には、指押さえ・タタキによる整形が施される。

61は土師質の鉢である。胎土は堅緻で、硬質である。体部は膨らみをもちつつ開き、口縁部に至る。口縁下にわずかに断面三角形の凸帯を貼付ている。内面は横ハケにより調整されている。

62～66・69は、東播系須恵器の鉢である。片口のつくものであろうが、いずれも口縁部のみの破片であり、全体の形状は記述し得ない。口縁端部の形態に特徴が認められ、肥厚させつつ上方に細く拡張するもの（62）、上下に拡張するもの（63・64）などが見られる。

68は椀である。通常、当該時期に見られる椀に比べ、器壁が厚く口縁端部が内外に拡張されて、上部に平坦な面が形成される点を特徴とする。

70は白磁の小皿である。わずかに膨らみをもつ体部から、やや外反して終わる口縁部に至る。高台は逆台形状を呈し、高台と体部の接合部外周にはヘラケズリが施されている。体部下半から高台部は施釉していない。また、内底面に輪状の釉切れが見られる。

71は青磁碗である。外面に蓮弁文を陰刻するが、蓮弁上縁をジグザグに陰刻した後、縦方向の線を陰刻しているため、一部に上下の文の不整合が認められる。

72は玉縁の白磁椀である。内面に一条の沈線を陰刻している。

第3表　出土土器観察表　（2）

番号	出土位置	器種	計測値（cm）	整形・調整	器形・装飾の特徴
45	SK－1 堆　土	羽　釜 土師器	口径 24.0 腹径 27.6	外面　タタキ 内面　横ナデ	体部下半が膨らみ、扁平な形状 口縁端部は内傾する面をもつ 外面に断面三角形の鍔を貼付けその直下に強いナデを施す
46	SK－1 埋　土	羽　釜 土師器	口径 29.5	外面　タタキ	体部下半が膨らみ、扁平な形状 口縁端部は内傾する面をもつ 鍔は45よりやや浅い　　鍔の直下に強いナデを施す
47	SD－3	鉢 須恵器	口径 31.0		直線的にのびる体部をもつ 口縁部は上下に拡張され、傾斜する端部をみせる
48	SK－2	鉢 須恵器			口縁端部が肥厚する
49	SD－3 （弥生遺構）	椀 須恵器	底径 8.1		糸切りの扁平な底部をみせる
50	SA－1 柱穴3	鉢 須恵器			直線的にのびる体部をもつ 口縁部は上下に拡張され、端部は丸みをおびる
51	A地区 包含層	皿 土師器	口径 10.2　底径 9.0 器高 2.0		体部は急斜度で立ち上がり口縁部に至る
52	A地区 包含層	壺？ 土師器	底径 8.0		体部は扁平な感を受ける
53	A地区 包含層	鉢 土師器	底径 10.9		底部と体部の境界は不鮮明
54	A地区 包含層	羽　釜 土師器	口径 24.1		口縁部は内傾し、端部はやや肥厚する断面三角形の鍔を貼付ける
55	A地区 包含層	羽　釜 土師器	口径 20.0	外面　タタキ 内面　横はけ	口縁部は内傾し、端部を上方につまみ上げる
56	A地区 包含層	羽　釜 土師器	口径 22.8	外面　タタキ 内面　横はけ	口縁部は内傾し、端部を上方につまみ上げる
57	A地区 包含層	羽　釜 土師器	口径 25.0		口縁部は内傾し、端部はやや肥厚しつつ外反気味に終わる 断面三角形の鍔を貼付ける
58	A地区 包含層	羽　釜 土師器	口径 22.8		内傾する口縁部から、体部下半が膨らむ形態を示す 鍔は形骸化し、体部への強い横ナデにより形成される
59	A地区 包含層	羽　釜 土師器	口径 25.4	外面　タタキ・指押さえ 内面　指押さえ	内傾する口縁部から、体部下半が膨らむ形態を示す 鍔は形骸化し、体部への強い横ナデにより形成される
60	A地区 包含層	羽　釜 土師器	口径 24.3	外面　指押さえ	内傾する口縁部から、体部下半が膨らむ形態を示す 鍔は形骸化し、体部への強い横ナデにより形成される
61	A地区 包含層	鉢 土師器	口径 25.0　底径 10.6 器高 8.7	内面　横ハケ	平坦な底部から、膨らみをもちつつ口縁部に至る 口縁下に退化した断面三角形の鍔を貼付ける
62	B地区 包含層	鉢 須恵器	口径 3.17		口縁部を上方に拡張する 口縁部外面には傾斜する凹面を形成する
63	B地区 包含層	鉢 須恵器			口縁部を上下に拡張する 口縁外面には直立する面が形成される
64	B地区 包含層	鉢 須恵器			口縁部を上下に拡張する 口縁外面には直立する面が形成される
65	B地区 包含層	鉢 須恵器			口縁部を上下に拡張する 口縁外面には直立する面が形成される
66	B地区 包含層	鉢 須恵器			口縁部を上下に拡張する 口縁外面には直立する面が形成される
67	B地区 包含層	皿 須恵器	口径 8.2　底径 5.6 器高 1.9		口縁部は直線的に外方へ開く
68	B地区 包含層	椀 須恵器	口径 14.7		口縁部が肥厚し、端部には平坦な面を形成する
69	B地区 包含層	鉢 須恵器			口縁部を上方に拡張し、口縁端部には傾斜する面を形成している
70	B地区 包含層	皿 白　磁	口径 9.4　底径 4.9 器高 2.9		口縁部が外反する 高台部は釉が施されていない
71	B地区 包含層	椀 青　磁			青磁碗口縁部の破片 外面に退化した蓮弁を施す
73	B地区 包含層	椀 白　磁	口径 15.0		玉縁の白磁椀でⅣ類に属する 底部を欠損する

第３節　その他の遺物

１．須　恵　器（図版10　42～44）

Ａ地区の湿地部上面で、古墳時代後期の須恵器３点が出土している。湿地部が埋没して、概ね平坦化された時点での堆積物（砂質シルト層）より出土しており、湿地部が平坦化された時期を示す資料と考えられる（第２表　42～44）。

２．石　　器（第２図）

平成８年度の調査では、合計　点の石製品が出土したが、いずれも原位置を遊離した状態である。またその大部分はサヌカイトのチップである。ここでは、二次加工を施された石器および礫石の、計５点を記載する。

１はサヌカイト製のナイフ形石器である。横長剥片の打面側縁に、腹面側から急斜度の二次加工を施す。刃縁側先端部にも、腹面側からの打撃による剥離が施され、これによって尖頭部が作り出されている。また、刃縁側下端にも、腹面側を打面とする不規則な剥離痕が認められる。これが意図的なものであるならば、基部を意識したと判断できようが、いささかの躊躇を覚える。

背面側は、２枚のネガティブな剥離面と、１枚のポジティブな剥離面（石核底面）から構成されており、ナイフ形石器の素材剥片が、大型の剥片素材石核から剥離されたことを示している。

本例は、国府型ナイフ形石器との間に、技術・形態上の類似点を見いだすことができるが、背面の構成からは、瀬戸内技法が技術基盤と判断することはできない。本例のみから評価するならば、近畿地方後期旧石器時代のⅢｂ期～Ⅳ期（久保1994）に属するものといえよう。

２はサヌカイト製楔形石器である。素材については判断が難しい。相対する二側縁から剥離がおこなわれており、図の上下縁には、いわゆる載断面が形成されている。

３はサヌカイト製削器である。縦長剥片の１側縁に、細かな二次加工を施して、内わんする刃部を形成している。

２・３は、１と比べて風化が弱いことから、縄文時代以降の所産と考えられる。ただし本遺跡では、縄文土器等は出土していない。

４は砂岩製砥石である。扁平な自然礫の形態を大きく変えず、片面を砥面として用いている。

引用文献

久　保　弘　幸　（1994）「瀬戸内技法を伴う石器群の変遷」『瀬戸内技法とその時代』

第4節　ま　と　め

弥生時代

今回の調査で検出された竪穴住居跡群は、円形住居・方形住居・隅丸長方形住居の3群に分けられる。出土遺物に多寡の差が極端であるため、厳密な時期の決定ができないものもあるが、円形住居については、SH－1の資料をもとに、弥生時代後期中頃、隅丸長方形住居については、SH－7の資料をもとに弥生時代後期末と判断して大過なかろう。円形住居には、いずれも方形住居が重複していることから、後者の建築にあたり、前者の存在が意識されていた、換言すれば円形住居から方形住居への建て替えがおこなわれた可能性が指摘しうる。したがって両者には大きな時期の懸隔はなかったものと思われ、SH－2の資料からも、ある程度首肯される。

住居跡群は、時期の差こそあれB地区内で東北東－西南西方向に直線的に並ぶように見える。これはとりもなおさず微高地の延びる方向を示している。隣接のA地区内に竪穴住居が分布しないことを考え合わせると、集落（微高地）の中心は北側にあるものと思われる。

中　　世

いずれの建物群も全体を調査し得なかったため、ただちに比較することは拙速とするべきであろう。しかしA地区の建物群が溝で画されるのに対し、B地区の建物群は柵で区画されるという、構造上の相違点をもつ。この相違点は時期差に還元できようが、A地区内でも若干の時期幅をもつであろうことが、出土遺物から知られる。

A地区SK－1出土の羽釜は、鍔の退化形態から、14世紀代に比定する考えが提唱されている（中川1996）。包含層出土の羽釜のうち、近似した形態を示すもの（54～57）、概ね同時期と考えてよかろう。包含層出土の羽釜には、さらに別型式に分離しうる一群が認められる（58～60）。前出の羽釜に比べ、さらに鍔が退化した形態を示すこの一群は、型式学的に後出のものと考えられ、14世紀末～15世紀代に比定しうるものであろう。

A地区の遺構群の重複状況と、包含層出土遺物を積極的に解釈するならば、A地区の遺構群（SB－3・4）は、14～15世紀代にかけての複数時期の遺構群が重複した姿と言えよう。

これに対しB地区の遺構群は、出土した東播系須恵器の鉢類を参考とすれば（47・48・50）、従来の編年観（森田　1986）の第Ⅱ期に相当するものを主体としており、これは、B地区包含層出土の遺物（62～69）も概ね共通している。こうしたことから、B地区の遺構群（SB－1・2）は、大略12世紀末～13世紀前半の中で解釈しても大過あるまい。

引用文献

中　川　　渉　（1996）「第6節　中世の土器」『神戸市西区玉津田中遺跡　第6分冊（総括編）－田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』兵庫県文化財調査報告　第135－6冊

森　田　　稔　（1986）「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号

第４章　調査の成果（２）　97年度の調査

第１節　弥生時代の遺構と遺物

１．概　　要

平成９年度の調査は、区画整理事業の道路部分にあたり、平成８年度に神戸市教育委員会が実施した調査区の東側の続きの部分が主である。検出した弥生時代の遺構は、平成８年度の調査結果と同様、小区画の水田跡である。なお、調査区は４地区に分かれており、北から順にＡ～Ｄ地区と呼称している。

水田跡は上部を厚い洪水砂で覆われていたため、畦畔等の遺存状況は極めて良好で、畦畔高が約20cm遺存している部分が多かった。また、水田面には足跡や洪水時の交互砂礫堆も確認できた。神戸市教育委員会の調査結果と合わせると、水田跡は巨視的に見て、東から西への緩やかな傾斜面に構築された棚田のような状況を呈していた。

水田跡の時期は洪水砂出土土器や平成８年度調査時出土土器から、弥生時代後期末～古墳時代初頭の庄内併行期と考えられる。

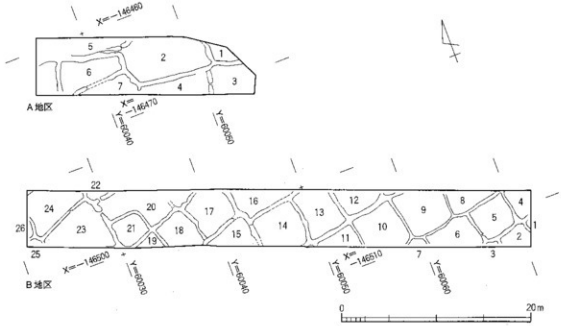
２．Ａ地区の水田跡（第３図、図版14・15・17・18、写真図版７・８）

Ａ地区は平成９年度調査では最も北に位置する調査区である。本地区では現地表下約1.2mで小区画水田跡を８筆検出した。水田土壌は非常に粘質の灰色シルトで、その上層には明褐色・黄褐色・黄灰色の細粒砂～中礫の砂礫層が0.8～１mの厚さで堆積していた。この砂礫層は洪水による堆積と考えられる。その上層は黄褐色系の極細粒砂～細粒砂で、洪水堆積の上に構築された中世以降の水田土壌と考えられる。洪水砂礫はさらに、シルト層、砂層、砂礫層の各部分に分かれ、上部（４～６層）は粒が粗くなっている。下部（８層）の砂礫は粗くても細礫までで、ラミナ状にシルトが堆積している部分（９層）が調査区内西部で認められ、部分的に厚い箇所も存在する。したがって、Ａ地区西部では洪水砂を被った後も水田を営んでいたことが推定される。ただし、砂礫がかなり泥じったものであることから、水田構築に際しては天地返しを行った可能性が高い。このことは、Ａ地区西隣の平成８年度調査部分で上層水田が検出されていることや、鍬による掘り込み痕が検出されていることからも推定できる。なお、Ａ地区内上層水田では畦畔は確認できなかった。

水田跡は１筆全体が明らかになったものはないが、本地区では東西方向に長い水田となっているようである。水田畦畔の接続部は平面「Ｙ」字状になるように畦畔を湾曲させている状況が伺える。

検出した水田は８筆であり、それぞれ水田面の高さが若干異なっている。第３図に示した番号の１が最も高く、番号順に低くなっており、７が最も低い。このことから調査区内の旧地形は、北東部が最も高く南西部が最も低い傾斜面となるが、その比高差は約20cmであり、傾斜としては緩い。

水田畦畔に水口が存在するものが少ないことから、各水田への水の供給は畦畔をオーバーフローさせて行っていたと考えられ、隣り合った低い方の水田に供給している。調査範囲が小さいため不明確であるが、１と２の水田面の高低差は６cmと少ないが、１と３の高低差は15cmと大きい。同様に、３と４の高低差も３cmと少ない。また、５と６の高低差が14cmと大きいことから、５の水田の西側に５とは高低差があまりない水田が存在している可能性が大きく、７の水田の南西側が最も低い水田となっている可能性が高い。その部分はちょうど平成８年度調査区内の流路（溝31）が存在する部分に近くなる。



第３図　Ａ・Ｂ地区水田筆番号図

なお、畦畔に水口を設けている部分も存在する。上述の高低差の大小を加味すると、他の水田へ供給し、かつ高低差の少ない水田間には水口を設けているようである。

水田面には人間の足跡が数多く遺存しており、足跡内には洪水砂が堆積していた。足跡の大きさは17㎝から25㎝程度まで認められ、親指が内反しているものが多い。２や６の水田など歩いた状況を示す箇所も認められたが、蛇行した列のもので、農作業等を示すものとは考えられない。足跡の深さは３～６㎝程度のものが最も多かった。

水田畦畔については、断ち割って土層断面を観察した結果、水田面と同じ土層で盛り上がっただけのものや別の土を盛ったものが認められたが、後者でも盛られた下の土の上端は盛り上がっており、しかも水田土壌と同じ土であることから、耕作のたびに低くなった部分に盛り上げただけの簡単な方法を採っていたものと思われる。

なお、３・４の水田を貫くかたちで溝が存在するが、これは洪水時の交互砂礫堆と考えられ、砂礫が充満していた。流れの方向は、南東から西へ低くなっているところから、西流しているものと思われる。

３．Ｂ地区の水田跡（第３図、図版14・15・17・18、写真図版７～９・21）

Ｂ地区はＡ地区の南側に位置し、長さ53m、幅６mで、平成９年度調査区では最も面積が広い地区である。本地区では小区画水田跡を26筆以上検出したが、それらは調査区東側では地表下約90㎝、西端では地表下１mに存在していた。水田の高低差は東側に較べ西側が約70㎝低くなっている。水田土壌はＡ地区同様灰色シルトで、非常に粘質である。水田面の上層には洪水による砂礫層が堆積していたが、それらは調査区中央部西寄りの最も厚いところで約80㎝、東側は約30㎝であるが、東端付近では砂礫層は徐々に薄くなり、その上に黄褐色の粘質土等が堆積している。この砂礫層上面が中世の遺構面になっている。砂礫層の上には黄褐色系の粘質土が堆積しており、中世以降の水田土壌と思われる。

水田跡は１筆全体が明らかになったものは僅かであるが、ほぼ正方形からやや長方形のものであり、その一辺は2.5mから６mである。水田畦畔の接続部は平面「Ｙ」字状になるように畦畔を湾曲させて

いる部分が多いが、一部「＋」字状に交差している部分もある。畦畔の方向はほぼ東西－南北方向で、調査区東部で東西方向の畦畔が北東－南西方向に傾いている。これらは旧地形に左右された結果と思われ、第３図に示した水田番号の１番が最も標高が高く、番号が下るにしたがって低くなる。これらを巨視的に見れば、東から西への緩い傾斜となるが、微視的には南東から北西への緩やかな傾斜も存在する。

水田畦畔には顕著な水口は認められなかったが、４と５の間や５・６間、20・21間、20・23間、21・23間、23・24間といった比較的落差の小さい水田間に多く、５・８間のような落差の大きい水田間には殆ど存在しないという傾向はＡ地区と同じである。また、水配もＡ地区同様、畦畔をオーバーフローさせていたと考えられ、隣り合う低い水田に供給している。水田の高低差は東西方向に隣り合う水田間は少なく、南北方向の隣は高低差が大きいことを基本としている。以上のように、本調査区においては、最も早く水が供給されるのが１番の水田で、最も遅いのが25番水田となることが推定される。

本調査区では足跡はあまり多くは遺存していなかったが、４・５・15の水田で人間の足跡と13で犬と覚しき獣の足跡を検出した。足跡はいずれもあまり深く遺存していなかったが、足跡内には洪水砂が充満していた。人の足跡は、４の水田では南東方向に歩いた様子が伺えたが、それ以外のものでは詳しい状況は不明である。いずれにしても、農作業等を如実に示すものではないと考えられる。

Ｂ地区についてもＡ地区同様、水田畦畔を断ち割って土層断面を観察した。その結果、水田と同じ土層を盛り上げたものと、水田とほぼ同質の土を水田土層の上に盛ったものの二者が認められた。後者についてはＡ地区のように畦畔状に盛り上がった上に盛ったものではないが、強固な畦畔として固めるための土を使用したものでもない。したがって、ここでもＡ地区同様、耕作のたびに低くなった部分に盛り上げただけの簡単な方法を採っていたものと思われる。

洪水時の交互砂礫堆は本調査区でも検出され、12～15、16～15、16～18番の水田で認められ、いずれも砂礫が充満していた。高低差からいずれも西流しているが、16→15の箇所では水田の高低差を無視して深く刻んでいる。

遺物は３点出土している。74は壺口縁部で、洪水砂礫層から出土した。75も洪水砂礫層から出土したもので、壺または甕底部である。弥生時代中期最終末ないし後期初頭の時期と思われる。76は14番水田直上から出土した甕底部である。外面はタタキ、内面は板ナデ調整のようである。底部は平底であるが、体部がかなり丸みを持っていることと、内外面の調整手法などから、弥生時代後期末～庄内併行期の所産と考えられる。

４．Ｃ地区の水田跡（図版16、写真図版７・11・12）

Ｂ地区の南に位置するＣ地区は、今回の調査のうち最初に作業を開始した地区である。当初、発掘調査の機械掘削は深さ２ｍと設計されていたため、調査区東端で設計書どおりの深さまで掘削したが、洪水砂も現れず、シルト層ばかりであった。土層断面を精査した結果、砂粒を含むシルト層が認められたため、その面まで調査区西端から機械掘削することとした。表土からの深さは約１ｍであった。その過程で調査区東部で溝状遺構を検出したため、調査区壁面を精査した結果、溝状遺構上面からかなり掘り過ぎていることが判明した。結局、調査区内四壁を断面精査した結果、洪水砂は調査区北西部に限定して存在し、その他はシルトや極細粒砂等の堆積となっていた。水田面は調査区西端での表土からの深さは浅いところで45㎝、深くても55㎝であり、水田面をかなり掘りすぎていたことが判明した。

水田跡は平面的には調査できなかったが、調査区壁面の断面観察により北壁の西半部で畦畔２箇所と

水田面３枚を砂礫層下で確認した。砂礫層がない部分では水田土壌は認められたものの、面としては確認できなかった。西壁では、ほぼ中央部で畦畔1箇所とその両側に水田各１面が存在した。すべて砂礫層の下である。ただし、北部は攪乱を受け、畦畔は確認できなかった。南壁では西端付近で畦畔とその両側に水田面が存在した。その東側は水田面上にシルトや極細粒砂の堆積があり、削平や土層の混じり合いなどから畦畔や水田を確認することはできなかった。

以上の結果、Ｃ地区で確認した水田は、砂礫が堆積している調査区北西部に限られ、断面で確認した畦畔は平成８年度の調査結果から、畦畔は東西－南北に近い方向であったと考えられる。また、その高低差は調査区北西隅が最も低く、南－南東方向に上がっていく旧地形が考えられる。

５．Ｄ地区の水田跡（図版14・16、写真図版12）

本地区は最も南西部に位置し、平成８年度調査の際に水路のため未調査であった箇所である。

ここでも水田跡を検出したが、調査区の幅が狭いこと、中世の溝で切られていること、水田面上には砂礫ではなく極細粒砂～細粒砂が堆積していたことなどから、水田土壌と堆積土との境や畦畔等はあまり明瞭ではなく、遺存状況も良好ではない。特に調査区内西部については水田土壌と堆積土の分離が難しく、畦畔等を検出できなかった。しかし西部以外では、東西～北東南西方向と南北～北西－南東方向の畦畔を検出することができた。

水田面の遺存状況が良好でないため水田毎の高さの差は明瞭でなく、畦畔の高さも低いものであった。

本地区からは弥生時代の遺物は出土していない。

６．ま と め

平成９年度調査地区内で検出した弥生時代～古墳時代の遺構は、庄内併行期の小区画水田跡であった。

水田土壌は非常に粘質の灰色シルトで、畦畔は水田土壌を盛り上げて造った「手あぜ」であった。水田上部には洪水砂が覆っていて、水田跡の残存状況が良好な部分が大半であった。特に畦畔は、最も良好に遺存している部分では高さ約20cmであった。

水田の畦畔が接合する部分は平面「十」字部分もあるが、大半は平面「Ｙ」字状を呈し、対向する畦畔とはややずれて接続し、連続していない。

Ａ～Ｄ地区間の水田の比高差はＢ地区がもっとも高く、次いでＣ地区、Ａ地区、Ｄ地区の順である。Ｃ地区では西端部でのみ水田を断面で検出できたが、東部では水田上面が洪水による削平を受けていた。ここでは水田上面は確認できなかったが、水田土壌が存在しており、もう少し標高の高い所まで水田が存在していた可能性が高い。Ａ地区では全面にわたって水田を確認することができたが、すべて約90cmの厚い洪水砂礫に覆われており、水田耕作時には標高は低かったようである。なお、Ａ地区では洪水のあとに天地返しを行って、上層水田を構築したことが判明した。Ｄ地区では水田上面を覆っていた洪水砂礫は厚いところでも約10cmで、洪水による土砂の堆積は少なく、大きな削平も認められない。ただし、水田畦畔の遺存状況が良くないのは後世の土圧により押しつぶされたものと推察される。

各地区の水田は隣り合ったものでも比高差の大きいものと小さいものがあり、比高差の少ない水田間は水口による配水を行っている箇所が多く、それに対して比高差が大きい水田間は畦畔をオーバーフローさせて配水を行っていることが確認できた。

以上、今回検出した水田跡は出土土器より弥生時代後期末～庄内併行期と思われる。

第２節　中世の遺構と遺物

１．概　　要

中世の遺構については、96年度の神戸市教育委員会による調査の際に掘立柱建物跡２棟以上および建物跡と主軸・時期を同じくする土坑が検出されている。掘立柱建物跡のうち１棟は東西７間、南北４間の大規模な総柱のもので、柱穴内より土師器皿、須恵器椀、珪化木、柱部材などが出土している。土坑は長さ５m、幅約１mの長楕円形のもので、土坑内の東半分からは須恵器や木製品等が出土している。祭祀土坑と考えられているが、木棺墓２基が直列したものの可能性も捨てきれない。

97年度の調査では、96年度調査の建物跡と方向を同じくする建物跡とそれらに近い方向の溝を検出した。今回検出した溝と掘立柱建物跡の位置及び方向の関係から、堀を巡らせた館跡である可能性が高いと思われる。

以下、各調査区で検出した遺構と遺物を詳細に述べることとする。

２．Ａ地区の遺構

Ａ地区内では中世の遺構は検出されなかったものの、Ｂ・Ｃ地区で検出された溝の延長方向を追ってＡ地区東側で溝の上面検出に努めたところ、調査区幅約２mで、溝と同じ埋土の土層部分を幅約３m検出した。ただし、長さについては調査上の制約があり、約１mに止まった。また、掘削も行っていないため、確実な時期は不明であるが、溝の方向が南北であることと、埋土が同じであることから、Ｂ・Ｃ地区で検出されているSD－04と同一の溝としてつながるものと思われる。

３．Ｂ地区の遺構と遺物（図版15・18～20、写真図版10）

庄内期の水田跡を覆っている砂礫層の上面で掘立柱建物跡１棟と溝２条を検出した。

掘立柱建物跡（SB－01）はＢ地区西部に存在し、規模は２間以上×３間の総柱建物である。現状では東西に長く、南北軸は座標北から約15度東に振れている。建物跡の規模が大きくなるとすれば、北側に伸びる可能性がある。柱穴の線をつないだ建物跡のラインはやや歪んで平行四辺形に近い形となっている。柱穴間は東西・南北ともほぼ215～225cmで、柱間による桁・梁方向は判断できない。現状での規模は柱芯間で東西方向北側で6.73m、南側で6.55m、南北方向西側で4.24m、東側で4.15mとなっている。また、３箇所の柱穴柱痕内から土器が出土している。

図版20の77・80は北端柱列のＰ－７から出土した。77は須恵器の椀で、柱痕の脇に差し込まれたような形で出土した。口径16cm、高さ５cm、糸切り底で底径は4.6cm。口縁端部は丸くやや厚みを増す。重ね焼きの痕跡である色調の変化が口縁部に認められる。80は土師器椀もしくは皿の底部であるが、器表が磨滅しているため、調整痕は不明である。底径は７cmを測る。

東端柱列のＰ－10から出土した土師器小皿は78に図示したものである。これも土師器整体部とともに柱痕の脇に差し込まれたような形で出土している。口径は8.4cm、器高は2.2cmで、底部外面は回転ヘラ切り後指ナデを行っている。その他の部分は回転ナデである。

79は南西隅の柱穴柱痕の底から裏返しになって出土した土師器小皿である。口径は8.1cm、器高1.5cm、底径は6.1cmで、底部外面は回転糸切りとなっている。その他は回転ナデ仕上げである。

上記の遺物の特徴から、12世紀末～13世紀初頭頃の年代が与えられると思われる。

溝は建物跡の東側約2.5mのところで検出した小規模なSD－03とさらに東側に存在する幅約３mのSD－04がある。

SD－03は幅約1.2m、深さ約15cmで幅と深さがほぼ一定して直線的にのびる溝である。溝の埋土は最下に灰白色砂質土があり、その上に黄褐色系の粘質土が堆積している。溝は中央部分のみ幅を減じて掘り直されており、そこには灰色の粘質土が堆積していた。最終的には褐色～黄褐色の粘質土で覆われている。溝底は調査区内では南側が若干深くなっており、南流していたことが判断できる。建物跡と平行に走るが、建物跡から距離が離れすぎていることと、溝の規模が大きいことから、雨落ち溝とするには違和感があり、何らかの区画溝ととらえておきたい。出土遺物は図版20の90に示した須恵器椀口縁部がある。口径は15.5cmで、口縁端部は丸く端部内面は沈線状に窪んでいる。建物跡出土土器と同時期と考えられる。

SD－04は建物跡の東約13mの位置にあり、建物跡やSD－03と平行のほぼ南北方向である。幅は約３mと一定で、深さは55cm～65cmである。断面は断面逆台形を呈する。調査区内では長さ約６mにわたって検出した。底の高さは北側が南側に比べて約10cm低くなっている（標高12.48m）。溝埋土は最下層に粘質土混じりの灰白色砂層が約10cmの厚さで堆積し、その上層には灰色粘質土が主として堆積していた。

溝の底および埋土中から須恵器・土師器・白磁・瓦が出土している。出土した遺物のうち図版20に図示したのは土師器皿と白磁皿である。81～84の皿のうち83は溝底についた状態で出土し、82・84は最下層から出土した。81は口径8.2cm、器高1.4cm、底径6.1cm、82は口径8.4cm、器高1.3cm、底径5.7cm、83は口径7.5cm、器高1.5cm、底径4.6cm、84は口径8.4cm、器高1.3cm、底径５cmである。81・82は底部ヘラ切り、83・84は底部回転糸切りである。他の部分はいずれも回転ナデで仕上げており、内面底部に仕上げナデを施している。83の口縁部には黒変部分があり、灯明皿として使用した際の芯の痕跡と考えられる。85の白磁皿は口径9.4cm、器高3.1cm、底径4.1cm、削り出しの輪高台である。口縁部の端はやや反っており、ほぼ全面に灰白色の施釉が認められる。ただし、底部外面のみ露胎となっている。内外面とも表面の釉薬には細かい貫入が認められる。これらの出土遺物の特徴から、13世紀の年代が与えられるであろう。したがって、掘立柱建物跡・溝（SD－03・04）ともに同時期となる。

４．Ｃ地区の遺構（図版16、写真図版12）

Ｃ地区で検出した中世の遺構は溝4条である。いずれも調査区を南北に貫くと考えられるが、平面で確認できたのは２条に限られる。本地区は前項でも記述したように、機械掘削でかなり下まで一気に掘り下げてしまったため、溝はすべて上面検出できなかった。また、他に柱穴等の遺構が存在していたかどうかも不明である。

溝のうちSD－04は調査区東部で検出した最も規模の大きいもので、調査区壁断面での幅は約2.5m、深さは約60cmであった。この溝は規模と方向の点から、Ａ地区東部の溝やＢ地区のSD－04につながるものと見られ、南北方向の大きな溝がこの部分を走っていることが推定され、同時に条里と同一方向であることも判明した。溝埋土は褐灰色の粘質土で、粗粒シルトから極細粒砂である。溝底の標高は南側で12.25mである。ここでは溝埋土中からは遺物は発見されなかった。

かろうじて調査区南部で平面検出できたSD－03は、04とほぼ平行に走るもので、幅約1.3m、深さ約50cmである。埋土は最下層に褐灰色で非常に粘質の粗粒シルト、その上層には褐灰色の細粒砂が堆積していたが、最下層の下には部分的にではあるが砂礫層が集積している部分もあった。

以上の溝以外にもSD－03と平行方向に近いSD－02や、SD－03から約5.5m西側に位置し、平行方向と推定されるSD－01も存在したが、いずれも調査区壁断面で確認できたもので、遺物なども出土していない。ただし、溝の検出面としては同一面となるので時期的にも同様と捉えている。SD－04以外の溝の機能については全く不明である。

5．D地区の遺構と遺物（図版16・20、写真図版12・16）

本地区で検出した中世の遺構は東西方向の溝1条である。この溝は96年度の神戸市教育委員会による調査の際に検出されていたものであるが、溝は掘削していなかったため、今年度にその一部を含めて調査を行った。その結果、溝は東西に長い調査区全体の約60mにわたってほぼ同一方向で全域で検出した。ただし、その大半が溝の北岸のみであったため、調査区東端で溝全体を掘削して、全容を把握することとした。その結果、溝は幅約2.3m、深さは約35cmで、溝の形状や規模・方向・時期等からA～C地区で検出した南北方向の溝SD－04と同一種の溝であり、ともに条里方向と同一であるため、それらの溝と「L」字形に続く溝であることが推定できた。溝埋土は最下層が灰色で粘質の粗粒シルト～極細粒砂、中層は黄灰色系の極細粒砂～細粒砂で間に砂層を挟む。最上層は黒褐色の粗粒シルト～極細粒砂で、土器は主としてこの層から出土し、その他には中層の北岸に近い部分で出土している。東端での溝底の標高は12.1m前後である。

溝出土土器は図版20の86～89に示した。いずれも須恵器の椀で、それぞれの口径・器高は、86が15.5cm・4.6cm、87が14.9cm、現高5cm、88は15.8cm、5cm、89は16cm、現高5cmである。86・88の底部は回転糸切りで、いずれも13世紀初頭の所産と思われる。

6．包含層出土の遺物（図版20、写真図版16）

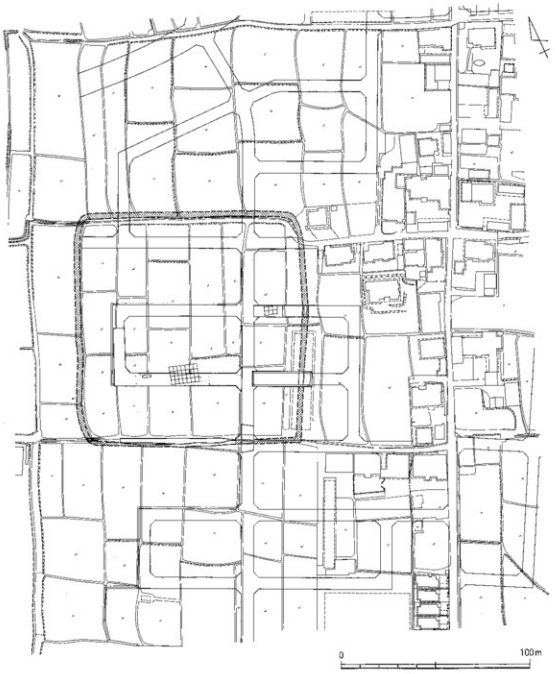
91～94は包含層出土土器で、91はA地区の第3層（砂礫層上層の黄褐色系粘質土）出土の須恵器杯で、口径は11.7cm、現高4.3cmである。92はB地区第3層（A地区第3層と同じ）出土土鍋口縁部で、口径20.8cmである。93はB地区第4層（洪水砂礫層）から出土した甕口縁部である。中世の甕もしくは弥生土器の可能性がある。口径は14.5cm。94はD地区砂礫層上面あたりから出土した土師器皿で、口径8cm、器高1.9cmで、底部は回転糸切りである。

7．ま と め

平成9年度の調査で検出した中世の遺構は掘立柱建物跡1棟と溝数条である。

掘立柱建物跡は南北軸が座標北から15度東にふれているが、平成8年度神戸市調査分の掘立柱建物跡とほぼ同一方向に軸を持つ。また、同時に各地区で検出したSD－04とも似通った方向である。

一方、溝はB・C・Dの各地区で検出したSD－04について、形状・方向・規模・時期が同じであることから、同一の溝である可能性が高いと判断した。そうすると、この溝は複数の建物跡を「L」字状に巡る溝となる。複数の建物跡を巡る溝の性格を考えると、居館の可能性が出てくるのであるが、居館の場合通常溝（堀）が四周を囲むものであることから、本遺跡においても溝が取り巻くものと考えたい。北側の東西方向の溝については、平成8年度に神戸市が実施した確認調査の際に検出された溝状落ち込みを採用し、D地区の溝との距離をそのままB・C地区の溝からの距離として、西側の南北方向溝の推定位置とした。この推定図が第4図である。この推定図では、幅約3mの溝（堀）を周囲に巡らせた、



第4図　中世館跡推定図

一辺約120mの方形居館跡とした。この館は条里の方向とは一致するが、条里区画線とは若干ずれている。すなわち、条里の南北方向区画線は第4図ほぼ中央の南北道路計画線にあたるため、東側に約30mずれている。ちょうど条里区画と館の南堀が接する地点について補助金による確認調査を実施したところ、橋脚と考えられる遺構を検出し、ここが入り口となっていた可能性が高くなった。一方、北側の東西方向の堀も条里の東西ラインより約15m北側に広がっている。この東側も入り口となっていた可能性がある。いずれにしても、条里区画と方向を同一にし、区画線とは若干ずらした位置に設けられた、溝で区画された館跡として考えることはあながち無理ではあるまい。

第５章　丸塚遺跡より検出された水田跡の植物珪酸体分析

パリノサーヴェイ株式会社

はじめに

丸塚遺跡は、明石川と支流の櫨谷川が合流する沖積地に立地し、北側は丘陵から張り出した舌状大地がある。本遺跡の周辺には、弥生時代前期末～終末期の拠点集落である玉津田中遺跡などの弥生時代の集落跡が立地しており、当時の人間の活動史に関する情報が蓄積されてきている。

今回の発掘調査では、Ａ地区・Ｂ地区から畦畔や水田面が検出されている。そこで、当時の水田跡における稲作の様態に関する情報を得ることを目的として、植物珪酸体分析を実施する。

１．試　　料

調査対象は、Ａ・Ｂ地区の水田面や畦畔上から採取された土壌試料24点である（第４表）。土質はほとんどの試料が砂混じりシルトからなるが、試料番号８はシルト質砂、試料番号９が砂である。

第４表　水田の分析試料

地区	試料	水田番号ほか	地区	試料	水田番号ほか	地区	試料	水田番号ほか
A	1	2－4　間　畦	B	9	第９層（下層水田）	B	17	10－12　間　畦
	2	1　　水　田		10	5　　水　田		18	12　　水　田
	3	1－3　間　畦		11	5－8　間　畦		19	19　　水　田
	4	2　　水　田		12	6　　水　田		20	19－21　間　畦
	5	2－7　間　畦		13	6－9　間　畦		21	21　　水　田
	6	3　　水　田		14	8　　水　田		22	23　　水　田
	7	7　　水　田		15	9　　水　田		23	23－24　間　畦
	8	第７層（上層水田？）		16	10　　水　田		24	24　　水　田

２．分析方法

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70Ｗ、250ＫＨｚ、１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計算する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から稲作について検討するために、植物珪酸体群集図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

第５表－１　水田の植物珪酸体分析結果　（１）

種類 / 試料名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ科葉部短細胞珪酸体												
イネ族イネ属	6	6	8	9	7	4	4	－	1	2	2	2
タケ亜科	118	125	139	122	107	131	107	10	125	126	131	117
ヨシ属	4	19	7	11	28	17	28	－	14	15	11	20
ウシクサ族コブナグサ属	2	1	4	3	2	5	2	－	4	2	1	2
ウシクサ族ススキ属	5	2	5	2	3	6	3	－	2	5	3	5
イチゴツナギ亜科	1	2	2	4	3	1	3	－	3	4	4	7
不明キビ型	23	15	12	17	20	10	20	4	14	30	14	22
不明ヒゲシバ型	30	33	22	39	45	37	45	2	31	35	25	43
不明ダンチク型	26	17	17	23	30	21	30	－	23	20	22	25
イネ科葉身機動細胞珪酸体												
イネ族イネ属	22	31	24	26	8	10	8	1	10	19	9	22
タケ亜科	50	61	52	42	49	45	49	29	55	54	69	47
ヨシ属	5	8	5	2	7	4	7	2	7	7	4	1
ウシクサ族	18	27	20	22	19	13	19	8	26	16	22	15
不　明	38	55	34	37	34	42	34	7	54	29	46	35
合　　計												
イネ科葉部短細胞珪酸体	215	220	216	230	242	242	242	16	217	239	213	243
イネ科葉身機動細胞珪酸体	133	182	135	129	117	114	117	47	152	126	150	120
総　　計	348	402	351	359	359	346	359	63	369	354	363	363

第５表－２　水田の植物珪酸体分析結果　（２）

種類 / 試料名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ科葉部短細胞珪酸体												
イネ族イネ属	2	7	4	10	2	3	4	4	4	2	5	3
タケ亜科	132	123	124	139	127	93	128	103	119	109	128	124
ヨシ属	10	10	24	24	2	14	14	14	12	3	12	15
ウシクサ族コブナグサ属	5	8	4	2	3	5	9	4	2	3	4	9
ウシクサ族ススキ属	2	4	11	13	3	6	4	6	7	6	6	6
イチゴツナギ亜科	6	6	8	14	2	2	3	1	5	3	3	2
不明キビ型	17	20	15	18	16	42	21	23	29	23	20	13
不明ヒゲシバ型	27	27	23	33	25	44	15	30	28	36	25	44
不明ダンチク型	25	27	19	9	29	28	22	24	28	27	23	29
イネ科葉身機動細胞珪酸体												
イネ族イネ属	12	24	45	42	14	13	25	22	20	10	25	8
タケ亜科	63	67	56	83	80	41	43	38	39	41	85	41
ヨシ属	3	8	15	10	3	－	3	－	3	2	4	3
ウシクサ族	5	25	16	17	17	20	13	11	14	13	11	14
不　明	31	40	49	20	46	32	40	44	30	36	31	44
合　　計												
イネ科葉部短細胞珪酸体	226	232	232	262	209	237	220	209	234	212	226	245
イネ科葉身機動細胞珪酸体	114	164	181	172	160	106	124	115	106	102	156	110
総　　計	340	396	413	434	369	343	344	324	340	314	382	355

3．植物珪酸体の産状

結果を第5表、第5図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出され、試料番号8（第7層：上位水田？）を除いて保存状態も良好である。試料番号8は珪酸体の保存が悪く、検出個数も少ない。

植物珪酸体組成は、いずれの試料もタケ亜科が多産し、次いで栽培種のイネ属、ウシクサ族（ススキ属を含む）が多産する。このほかヨシ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。

栽培種のイネ属は、下層水田の試料番号9（第9層）およびA・B区の水田・畦畔より採取された各試料から検出される。機動細胞珪酸体の検出個数は多く、出現率は20%を越える高い試料も幾つか見られる。水田耕土試料と畦畔構築土試料では、産状に大きな違いは認められない。

4．考　　察

A・B地区で見られた水田面では、複数地点からイネ属の葉部に形成される2形態の植物珪酸体が検出され、水田内にイネ属の植物体が混入していると考えられる。また、現在の水田耕土におけるイネ属の出現率としては、近藤（1988）の調査例がある。それによれば、イナワラ堆肥連用（8年間、500kg/10a/年）の水田土壌表層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率は16%をしめすされている。今回は、この出現率と比較しても同等あるいは高い試料が多かった。これらから、今回のイネ属の産状は水田跡での稲作を裏づけるものと言える。

なお、イネ属の出現率が高い場所が幾つか見られた。この要因として、水田層へのイネ属植物体の混入量が局地的に多かったこと、あるいは耕作期間の違いが現れたことなどが考えられる。また、水田面と畦畔でのイネ属の産状はほぼ同様であったことから、畦畔を構成する土壌が稲作耕土を利用していることが推定される。すなわち、調査を行った水田は、複数年に亘って耕作が行われていたことを示唆している。

また、下層水田の第9層からもイネ属が検出された。考古学的所見を裏づける結果と言える。ただし、第7層の上位水田？は保存状態が悪く、検出個数も少なかったため、稲作の可能性を検討することは困難であった。これらの水田層については、今後さらに同一層位において空間的に地点を増やし調査を行うことで再評価したいと考える。

検出された植物珪酸体の種類は、その生態性を考慮すると、水田の周囲に生育していた可能性が高いものと、水田内もしくはその近辺に生育していた可能性があるものとに区分される。水田外に分布していたと考えられる種類はタケ亜科である。タケ亜科にはササ類・タケ類が認められ、周辺の比較的高燥な場所に分布していたことが示唆される。一方、水田内に分布していた可能性がある種類はヨシ属、イチゴツナギ亜科が上げられる。これらの種類には湿潤な場所に生育する種類が含まれており、当時も水田雑草として分布していた可能性がある。なお、今回の試料中からは水質を反映する珪藻化石も検出されており、今後の調査で、珪藻分析を行うことで水田内の水質や水利に関する検討を行うための情報が得られるものと思われる。

なお、本遺跡の北西に位置する玉津田中遺跡の周辺については、旧石器時代～鎌倉時代までの地形および土地利用の変遷が明らかにされている（山下、1996）。このうち、弥生時代前期以降には自然堤防状微高地の緩斜面に水田が拓かれ、その後は弥生時代中期や古墳時代後期の大規模な洪水の影響を受けながら、水田が広がっている。本遺跡の水田は、明石川と支流の櫨谷川が合流する沖積地に立地しており、今後さらに当該期の水田の調査例を蓄積し、稲作の宇高の様態に関して検討したい。

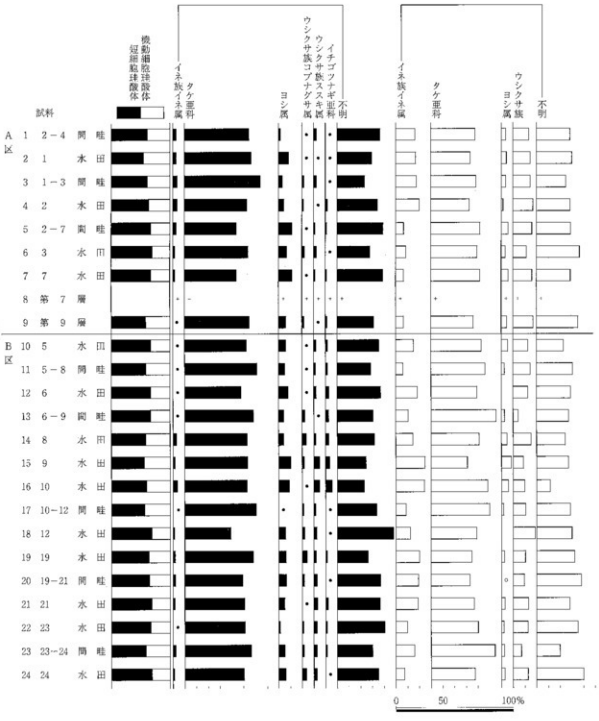
引用文献

近藤錬三（1988）十二遺跡の植物珪酸体分析．鋳師屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書，p.377－383，御代田町教育委員会．

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31－64

山下史朗（1996）玉津田中遺跡の地形変遷．神戸市西区玉津田中遺跡－第６分冊（総括編）

田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－，兵庫県文化財調査報告第135－６冊，p.９－14．



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は１％未満の種類を示す。

第５図　水田の植物珪酸体群集

第6章　総　　括

今回報告した丸塚遺跡の全面調査において検出した遺構は、調査年度による各地区の場所の違いはあるが、弥生時代後期の竪穴住居跡を主としたもの、弥生時代後期末～古墳時代初頭の水田跡や竪穴住居跡、平安時代末～鎌倉時代初頭の掘立柱建物跡や溝、鉄跡などの大きく3時期に分けることができる。

以下、各時期別に遺跡の様相や変化、位置づけを行ってゆくことにする。

第1節　弥生時代後期

1．竪穴住居跡

今回の調査では、竪穴住居跡は平成8年度調査区に限って円形と方形の合計5棟検出された。検出したのはB地区の西部に限られ、立地の点においては第6図をみてもわかるように、北東から南西にむかって緩やかに傾斜する斜面のうち、小さな支尾根状の微高地に占地している。96年度B地区のうち竪穴住居跡が存在しているのは、この小尾根稜線に近い部分である。竪穴住居跡が検出されていないB地区の東部は、この小尾根稜線から外れた位置でやや低い所になっており、そのため竪穴住居跡が築かれなかったものと推察される。B地区南東部分は等高線の状態から、小尾根に挟まれた小さな谷状地形となっており、住居を築造するには適さない所であったと考えられる。

以上の推察から、平成8年度B地区のさらに北側の小尾根稜線に乗った形で住居が存在している可能性が高いと考えられる。

2．土　　器

竪穴住居跡から出土した土器は弥生時代後期後半から弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期に比定される。このうち、後者については次節で述べる。また、竪穴住居跡以外の砂礫層からは後期前半に近い土器も出土している。本項では、これらの土器についてまとめることとする。

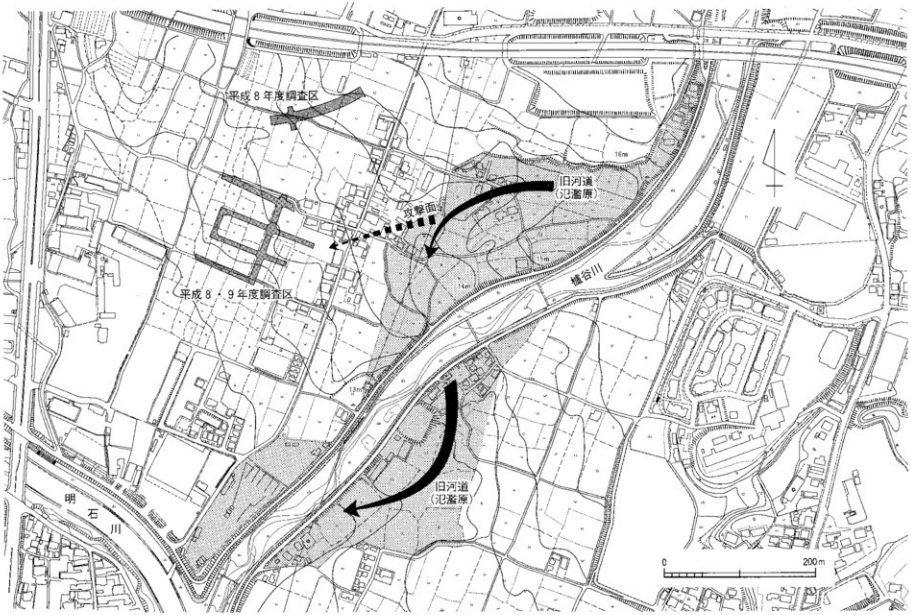
SH－1出土土器のうち4の甕は外面刷毛、内面が縦方向の箆削りという調整方法は後期前半に認められる調整手法であるが、体部が球形である点から、さらに時期を下げるべきであろう。6の甕は外面タタキのち一部に刷毛、内面は横方向の刷毛仕上げである。この手法は後期後半でも中頃に位置づけられるであろう。7の鉢についても、突出した底部を持ち、体部から口縁部が横外方に内湾気味に伸びるといった点で、後半の中頃でもやや下る可能性が高い。一方、SH－2出土の8の甕は口縁端部が上方に伸びて外面に沈線を施す。この手法は日本海沿岸地域といった北からの影響を受けたものと思われる。

9の壺は体部が丸いが底部は大きくしっかりしている。14の小形台付甕の内面は横方向の刷毛である。以上、SH－2出土土器の特徴は、後半中頃をやや下がったあたりに位置づけることができる。

なお、柱穴出土の28の甕は内面縦刷毛で外面はタタキ仕上げである。体部最大径も上位にあり、後期後半でも早い時期に位置づけられる。

さて、弥生時代遺構面の下層にある砂礫層から出土した土器であるが、34・35の甕口縁端部は面をもち凹線ないし凹面となっている。体部からの厚みが一定で後期前半に位置づけても遜色ないが、外面の調整が叩きである点により、後半の最も古い段階に位置づけたい。31～33の壺においても後半の初め頃に位置づけておくべきであろう。41の小型鉢も同時期の特徴を示している。

以上、本遺跡出土土器は後期後半の初頭から中頃まで連続しているようである。しかし、遺構については後半の中頃から存在している。その後は後述する後期末～古墳初頭まで連続するようである。



第6図 微地形復原図

第２節　弥生時代後期末～古墳時代初頭

１．竪穴住居跡と土器

当該時期の竪穴住居跡は96年度Ｂ地区のSH－７があり、SH－６も同時期の可能性が高い。これらの住居跡は平面隅丸長方形を呈し、形態的にも前代のものとは分けることができる。

SH－７床面土器群のうち、17の甕は体部最大径が下位にあると思われ、口縁部は叩き出し成形である。18の甕は体部最大径が上位にあるが、口縁部は受け口状の複合口縁で端部の器壁は薄い。外面調整は叩きのみ、内面は横刷毛と下位は板ナデのようである。また、19の高坏もしくは器台の口縁部は器壁が薄く外上方に大きくのび、形態、文様の点から淡路の寺中遺跡[1]のものと酷似している。以上のことから、SH－７出土土器は弥生時代後期でも最終末に編年されるものである。このことは22や23の壺や25・26の小型鉢が示す特徴からも首肯できるものである。また、水田面出土土器も同じ時期に位置づけられるものである。なお、この時期は庄内期に位置づけられる先進地域がすでに存在する[2]。

２．水　田　跡

前述の竪穴住居跡は今回報告した調査区のうち北方に存在する。遺構検出面の標高では14m以上に立地している。一方、水田跡は標高13m以下に立地する。水田跡については標高の高い部分が洪水や後世の削平を受けているため、さらに高所でも経営されていたかどうかは明らかにはできない。ここでは、住居と水田の占地理由について、標高ではなく、地形からみた要因に視点を置いて探ってゆきたい。

水田跡が発見された96・97年度調査区は、住居等が検出された96年度調査区の南側にあたり、南西に向かって下がる緩やかな傾斜面である。この緩やかな傾斜面のなかにも微視的には細かな起伏が存在する。Ｂ地区の水田跡では東端が最も高く西端が最も低いが、等高線はほぼ東西方向にあり、南東部が最も高く北西部が最も低いといった傾向が見て取れる。次に高いのがＣ地区である。Ｃ地区の東部は水田面が確認できなかったが、水田土壌が存在していた。高さは北西隅が最も低く南東に高くなってゆくことが推定できる。Ａ地区の最高所はＣ地区よりも低いが最低所はほぼ同じ高さである。Ａ地区では北側が高く南側が低い傾斜面となっている。したがって、Ａ地区は全体的にＢ・Ｃ地区より低く、Ｂ地区との間は谷状の地形となっていたことが推察される。ところで、第６図を見ると、標高13.5mのラインがＢ・Ｃ地区の間で西方に張り出している。この張り出しは現状ではＡ地区も含んでしまっているが、Ａ地区では洪水砂の厚みが非常に厚いため、このようになっていると思われる。前述した細かな地形の起伏を考慮すると、等高線の形状はＢ・Ｃ地区で最も張り出し、Ａ地区はこの張り出しに含まれていなかったものと推定することができる。ということはＡ地区あたりは低い地形が入り込んでいたものと思われる。この理由として、櫨谷川の旧河道ないし氾濫原であったことが理由として考えられる。

第６図で現状の等高線を追ってみると、櫨谷川に近い部分で南西方向に張り出している部分がある。この部分を境にした川沿い部分の条里区画内では、水田畦畔の方向が乱れており、旧河道であったことが判断できる。もっとも、この条里区画の成立時期が中世と推定されるため、どこまで遡れるかは不明である。しかし、等高線が張り出した部分は自然堤防、第６図でアミをかけた部分が旧河道であり、その結果、櫨谷川はもと大きく蛇行していたことが読み取れるのである。さらに、図内の点線の矢印で示したところが攻撃面となっていることから、洪水の際にここが決壊して水田部分に砂礫が流れ込んだものと思われる。その流れの中心部分がＡ・Ｂ地区あたりであったことは、流れの方向や調査区内の砂礫層の厚みからも首肯できるであろう。また、Ｃ地区では砂礫層の厚みが薄かったことも傍証していると思われる。Ａ・Ｂ両地区の水田面で検出された交互砂礫堆の方向も点線で示した氾濫方向と同一である。

弥生時代後期末の水田が廃絶された要因は、この、槌谷川の氾濫による洪水砂の多量の堆積であり、この砂礫をもたらした自然堤防決壊部分が図で示した攻撃面であることは疑う余地がなかろう。大洪水のあと、部分的に水田を再構築したようであるが、大半は放棄されたものと思われる。しかし、それと引き換えに水田跡は厚い砂礫層にパックされ、水田面が良好に遺存しているという事象をもたらした。

第3節　平安時代末～鎌倉時代初頭

1．96年度B地区の建物跡群

96年度B地区で検出された、12世紀末～13世紀初頭の掘立柱建物跡群は櫛列を伴うものの、大きな区画溝を持たず、調査時の所見等から館跡のような大規模な建物群とはならないようである。しかし、条里区画線によって区画された範囲に納まらずに約20m東側に広がっている。ここでも条里区画線が道路としての機能を兼ねており、建物群への入り口を確保するため、区画線内に収めずにずらしているものと考えられる。B地区ではこのように南北方向区画線からずらした位置に建物群を建造している。ただし、A地区では当該時期の建物跡が検出されていないことから、東西方向の区画線についてはずらすことなく合わせているようである。すなわち、建物群への入り口を確保するため、建物群の南側は条里区画線すなわち、道路が「T」字形になるよう、東側へずらして設計されているものと考えられる。

2．97年度調査区の館跡

さて、97年度調査区で検出した、溝を方形に巡らせた館跡と考えられるものは、近隣において同時期のものが玉津町二ツ屋遺跡[3]、玉津町玉津田中遺跡[1]でも発見されている。

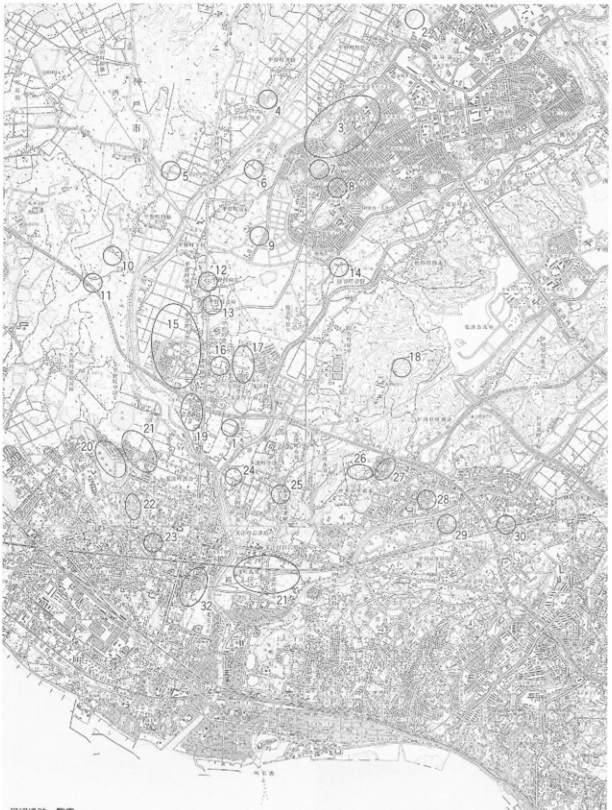
二ツ屋遺跡は丸塚遺跡の北東側約700mに位置し、瓦葺きの礎石建物跡を含む7棟の建物跡が溝で区画された100mの範囲内に存在している。建物跡は方向を揃えて整然と配置されており、母屋と考えられる2棟のほか、厩や厨と推定される建物も存在する。母屋の前には池や庭が存在しており、瓦葺礎石建物跡は持仏堂と推定されている。また、建物跡の他には井戸・墓などが検出されている。

一方、玉津田中遺跡は丸塚遺跡から約1km北西に位置している。館跡は幅5mの堀で方形に区画されているもので、東西約1町、南北1町以上の規模を有する。瓦葺き建物や掘立柱建物跡が検出されており、多くの土器を出土した池のほか広場も存在している。報告では二ツ屋遺跡とは時期を違えると解釈しているが、ここでは同時存在と考えておく。なお、二ツ屋遺跡と玉津田中遺跡の間は約1kmである。

このように近接した場所に館が3箇所も同時存在する点は、それぞれの館で土地や生産物等を掌握する範囲が決まっていたものと思われ、その区切る範囲が狭かったものと捉えることができるであろう。ただし、それらの範囲をここで明確にすることはできない。なお、これら3箇所の館跡を通じて共通する立地は、川に近い場所ということである。これらは、川に近い場所でなおかつ船着場となっている所、すなわち、水運に適した場所として理解することが妥当と考えられる。

註

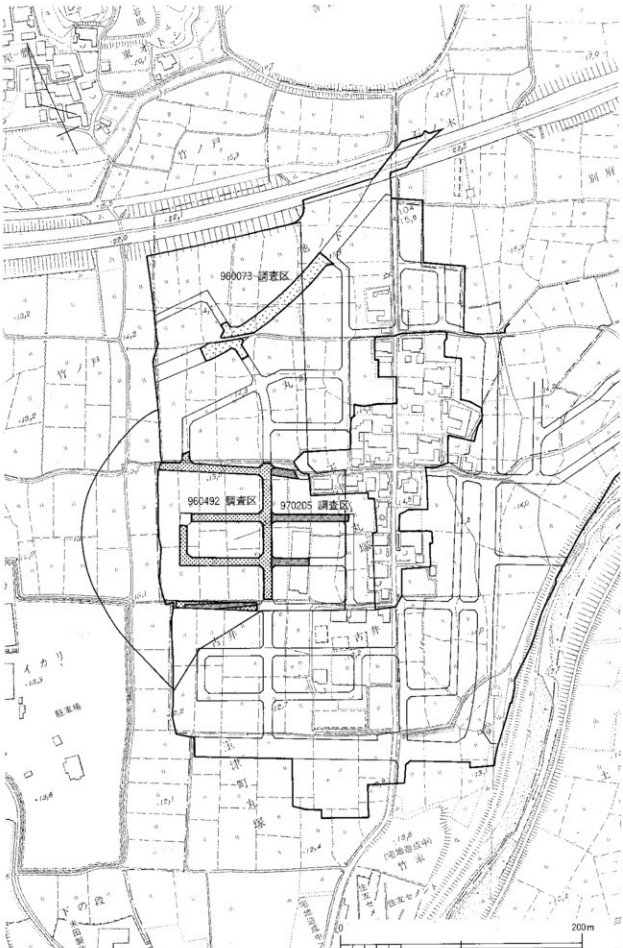
1．兵庫県教育委員会『寺中遺跡 ― 淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ ―』 1988年
2．兵庫県教育委員会『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ　禿山遺跡他』1998年
3．前田佳久「二ツ屋遺跡」『平成4年度　神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会　1995年
4．兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡 ― 第4分冊 ― (辻ケ内・居住地区の調査)』 1995年



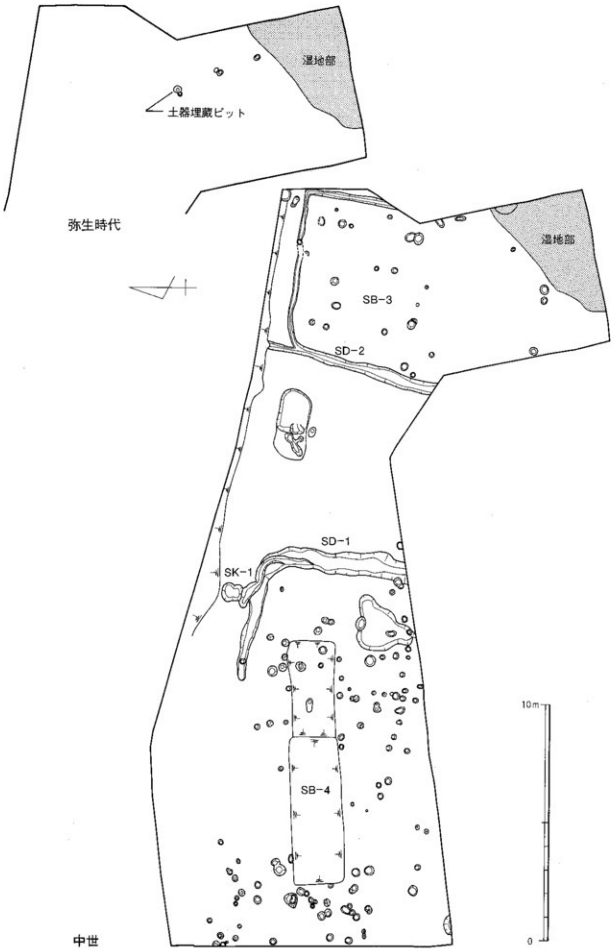
周辺遺跡一覧表

1	丸塚	9	西神ニュータウン第59地点	17	薬明寺古墳群	25	高津橋・岡
2	菱田中ノ池	10	中村古墳群	18	青谷	26	白水鳳塚古墳
3	常本西ノ口	11	上唐池	19	居住	27	天王山
4	西神ニュータウン内の古墳	12	福中城跡	20	野々池	28	北別府
5	大畑	13	玉崎	21	旧合	29	南別府
6	西戸田	14	西神ニュータウン第62地点	22	玉塚古墳群	30	池上口ノ池
7	西神ニュータウン第50地点	15	玉津田中	23	吉田・枝吉城	31	新方
8	西神ニュータウン第48地点	16	居住・小山	24	今津	32	吉田南

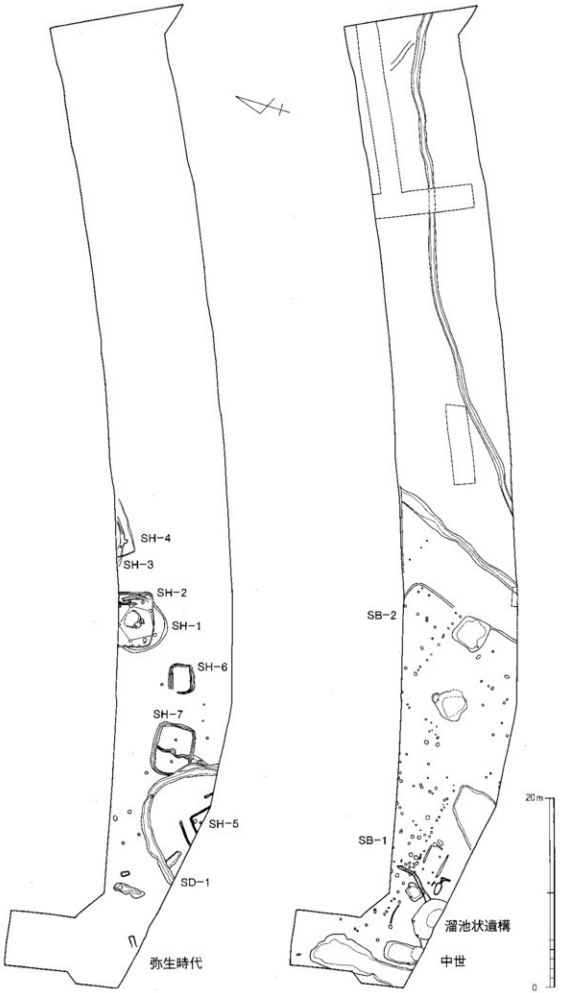
図版1　遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院　1：25,000「明石」「須磨」「東二見」「前開」



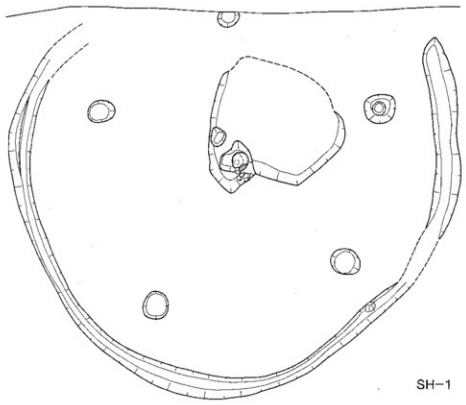
図版２　丸塚土地区画整理事業地全体図（神戸市　１：2,500「上津橋」「二層屋」）

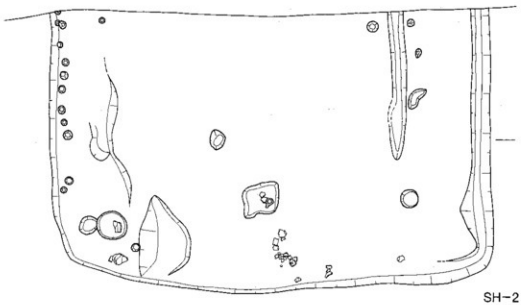


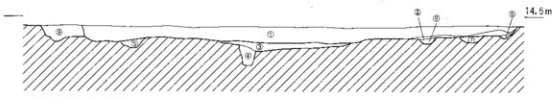
図版3　96年度A地区遺構平面図



図版4　96年度B地区遺構平面図

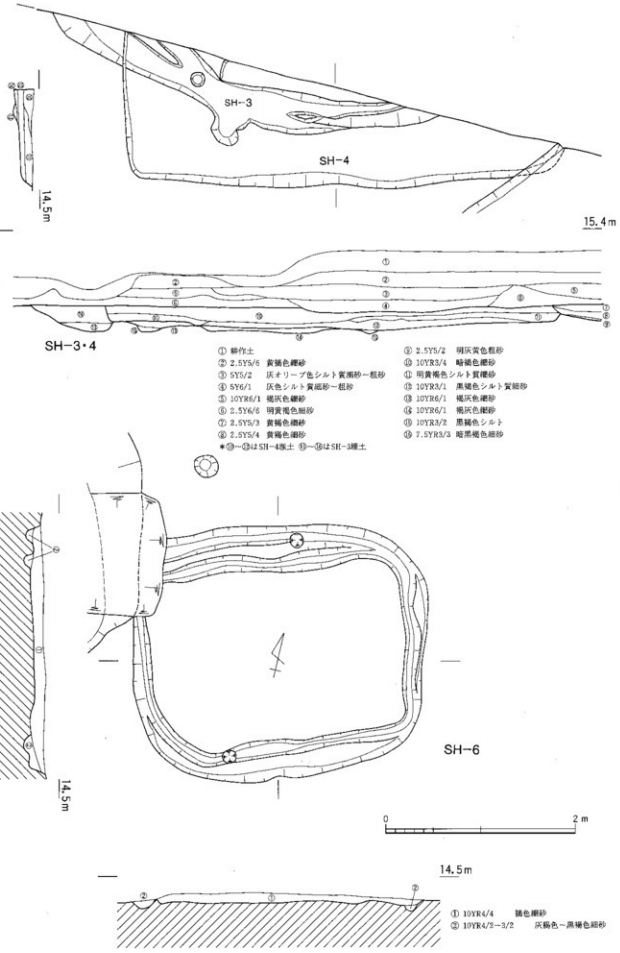




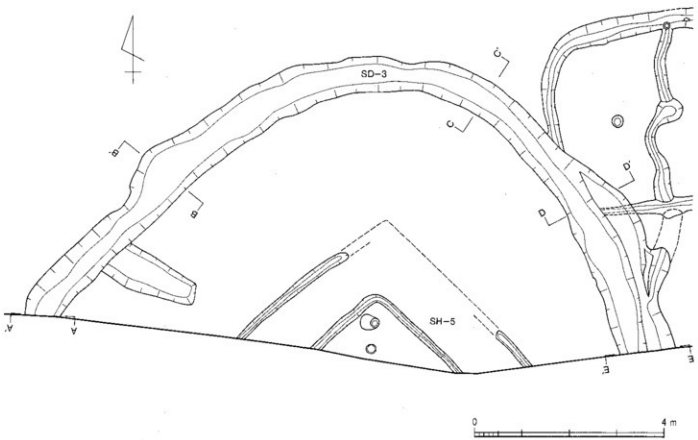


① 7.5YR3/1　黒褐色細砂
② 7.5YR3/1　黒褐色細砂（黄褐色粗砂をブロック状に含む）
③ 10YR2/1　黒色シルト質粗砂
④ 10YR3/1　黒褐色細砂
⑤ 10YR3/1　黒褐色細砂
⑥ 7.5YR3/2　黒褐色細砂
⑦ 10YR3/1　黒褐色細砂
⑧ 10YR3/1　黒褐色粗砂

図版５　竪穴住居跡平面／断面図（１）

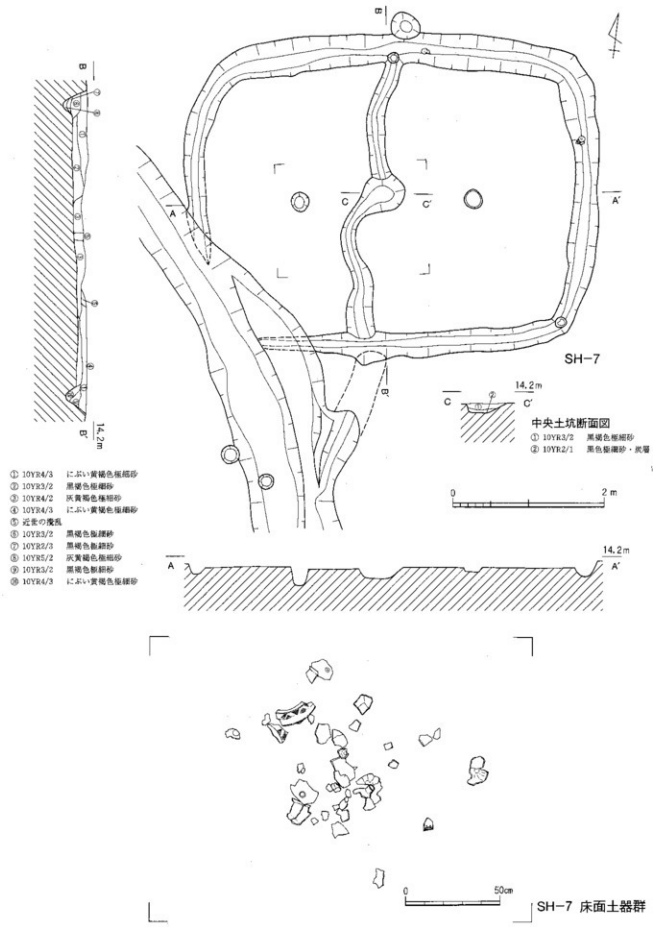


図版6　竪穴住居跡平面／断面図（2）

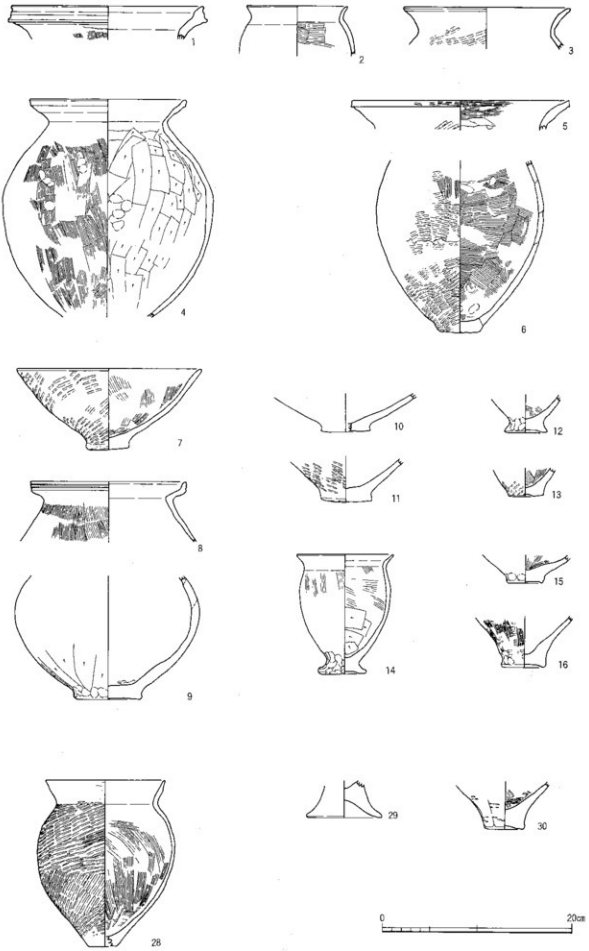


① 10YR5/2　灰黄褐色シルト質細砂
② 10YR3/2　黒褐色細砂

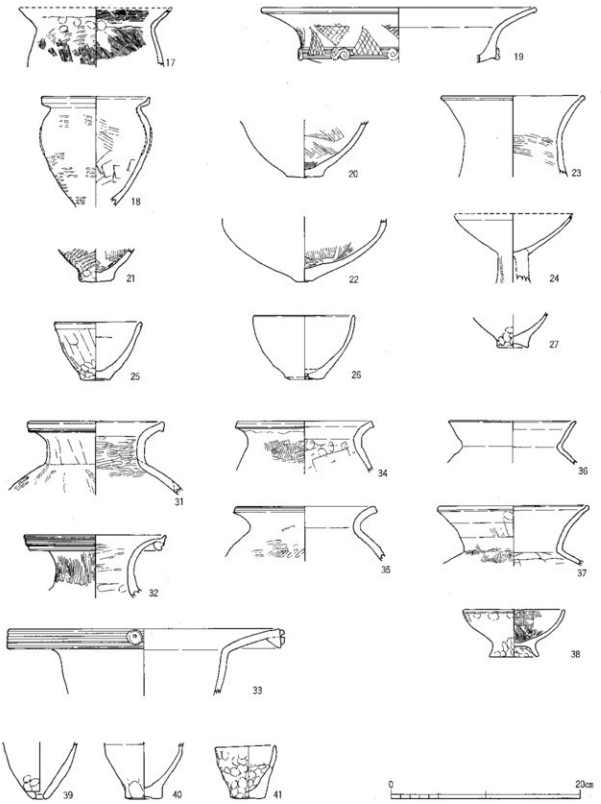
図版7　竪穴住居跡平面／断面図（3）



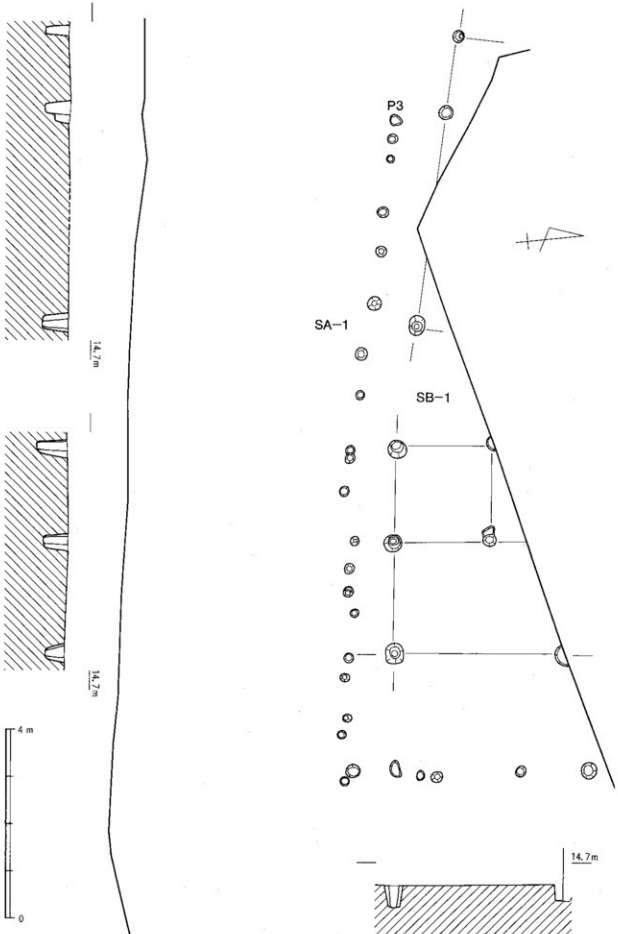
図版8　竪穴住居跡平面／断面図（4）



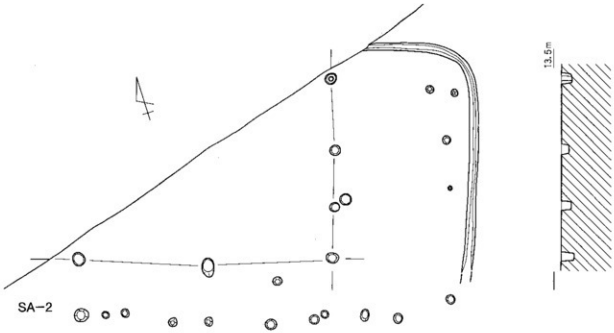
図版９　弥生時代の遺物（１）



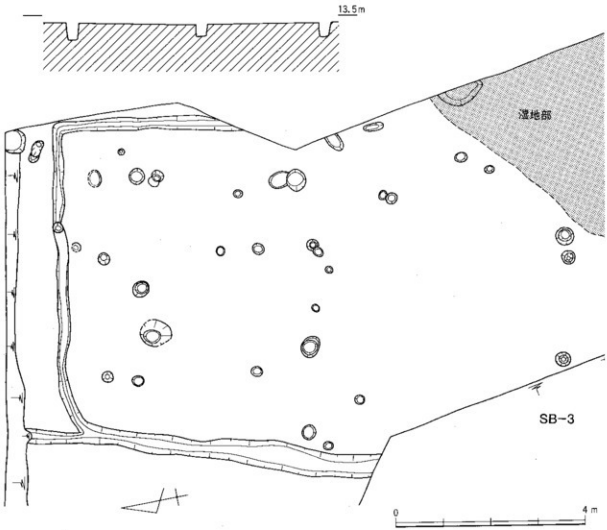
図版10　弥生時代の遺物（２）



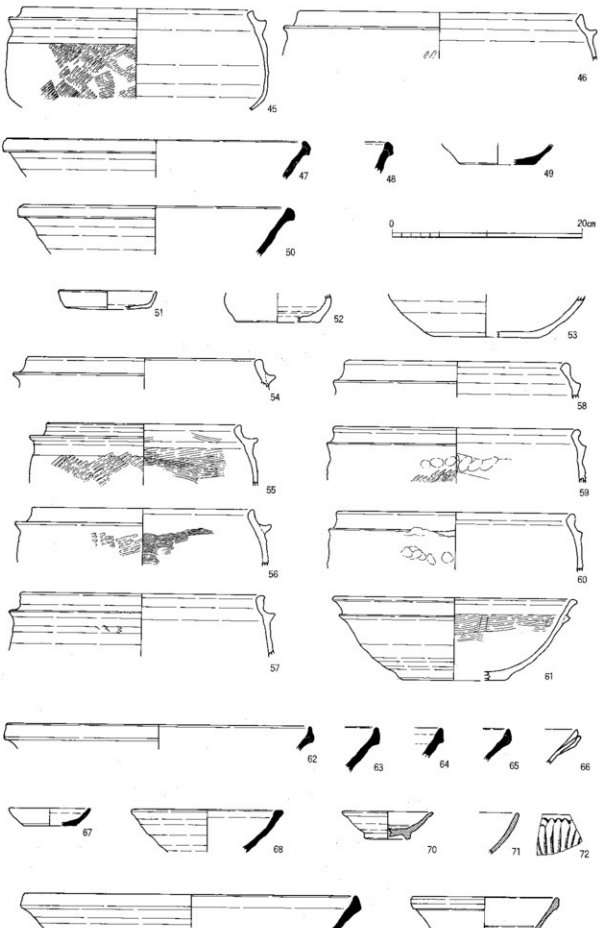
図版11　掘立柱建物跡　1平面図



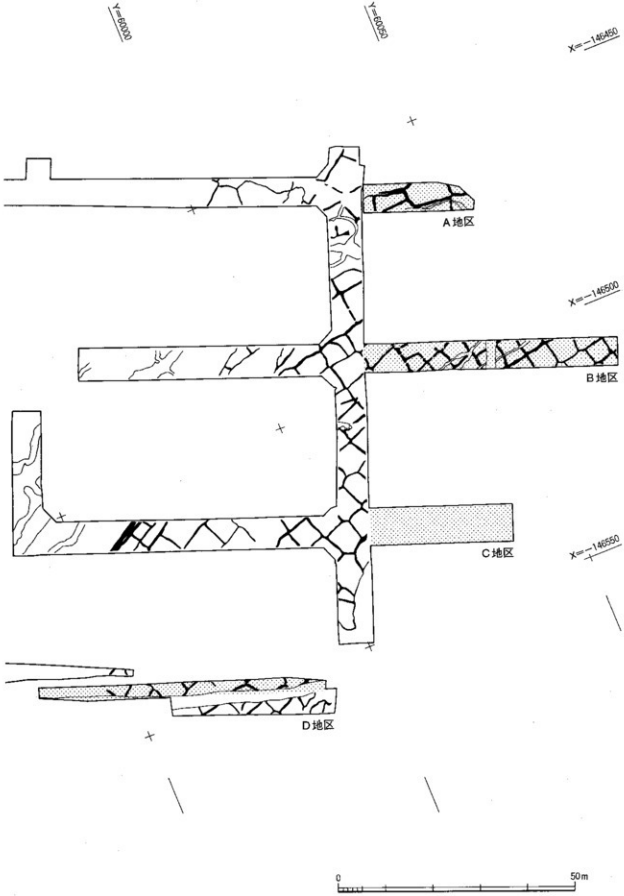
SB−2



図版12　掘立柱建物跡　2・3平面図

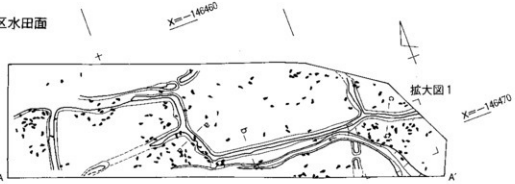

45
46
47
48
49
50
0
20cm
51
52
53
54
58
55
59
56
60
57
61
62
63
64
65
66
67
68
70
71
72
69
73

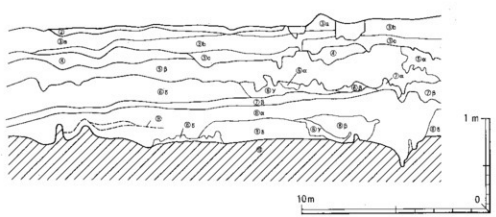
図版13　中世の遺物



図版14　97年度調査区　全体図

A地区水田面

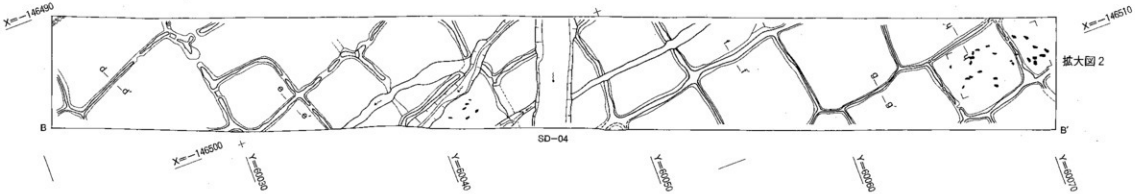




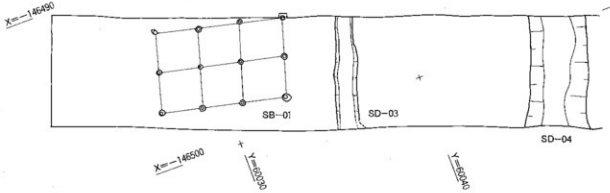
A地区 南壁 土層断面 土層名

②	2.5Y5/2	暗灰黄色	極細粒砂ー細粒砂。旧耕作土。
③a	2.5Y7/6	明黄褐色	極細粒砂ー細粒砂。中礫少量含む。やや粘質。
③b	10YR5/6	黄褐色	極細粒砂ー礫粒砂。細粒砂が多い。やや粘質で硬い。
③c	2.5Y5/3	にぶい黄褐色	極細粒砂。やや粘質で硬い。鉄分・マンガン を含む。
④	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂礫層。細粒砂ー中礫。海状悪い。
⑤α	7.5YR5/8	明褐色	砂礫層。礫粒砂ー中礫。海状悪い。
⑤β	7.5YR5/8	明褐色	砂礫層。礫粒砂ー中粒砂。
⑥α	2.5Y5/3	黄褐色	砂層。極粒砂。
⑥β	5.5Y5/3	黄褐色	砂層。細粒砂。
⑥γ	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫層。細粒砂ー細礫。
⑥δ	2.5Y5/3	黄褐色	砂礫層。細粒砂ー中礫。海状悪い。
⑦α	5Y5/1	灰色	砂層。極細粒砂ー細粒砂。
⑦β	5Y5/1	灰色	粗粒シルトー極細粒砂。粘質。極細粒砂がラミナ状に存在する。
⑧α	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫層。礫粒砂ー細礫。中礫少量含む。
⑧β	2.5Y5/1	黄灰色	砂層。細粒砂ー粗粒砂。
⑨γ	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫層。細粒砂ー細礫。礫が多い。
⑨δ	2.5Y5/1	黄灰色	粗粒シルトー極細粒砂と細粒砂ー粗粒砂の互層。
⑤	2.5Y4/1	黄灰色	ラミナ。シルト。粘質。
⑬	5Y4/1	灰色	水田土壌。シルト。非常に粘質。鉄分・マンガン含む。上端酸化する。

B地区水田面

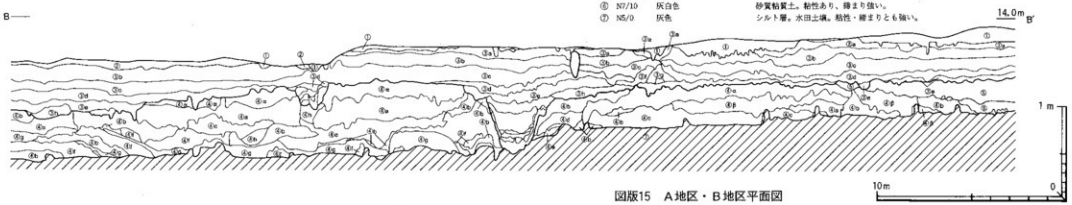


B地区中世面

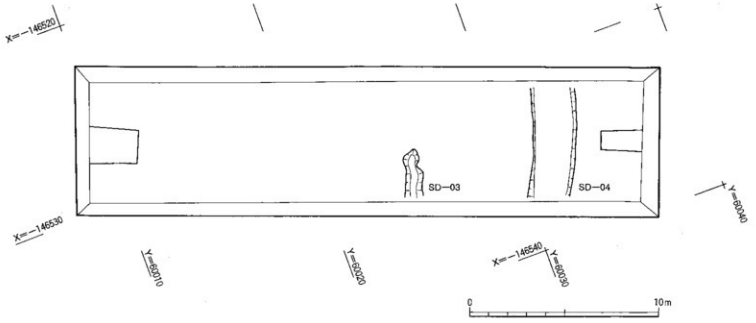


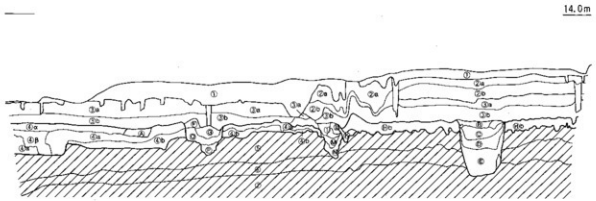
B地区 南壁 土層断面 土層名

①	5Y4/1	暗灰色	砂質土。耕作土。
②		灰色砂質土。床土。
③a	2.5Y5/6	濃灰色砂・黄褐色	粘質土。やや粘性、締まる。
③b	5Y4/1	混黄褐色粘質土・灰色砂層	粘性ないが固く締まる。
③c	2.5Y5/6	混砂黄褐色	粘質土。中礫少量含む。マンガン含む。粘性・締まりあり。
③d	2.5Y5/6	黄褐色	粘質土。灰色砂・マンガン含む。粘性・締まりあり。
③e	2.5Y5/6	黄褐色	粘質土。灰色砂少量含む。粘性・締まりあり。
③f	10Y7/1	混砂灰白色	粘質土。粘性・締まり強い。
③g	5YR6/8	濃橙褐色	粘質土。マンガン含む。粘性あり、締まり強い。
③h	5Y6/1	混砂灰色	粘質土。中礫少量含む。粘性・締まりあり。
④α	7.5YR4/6	褐色	砂礫層。硬く締まる。
④β	7.5YR6/8	濃橙褐色	砂質層。中礫多く含む。締まり強い。
⑤a	7.5YR5/8	明褐色	砂礫・粘質土。締まり強い。
⑤b	10YR5/8	黄褐色	砂層。粘性ややあり。締まりなし。
⑥c	5Y8/1	灰白色	砂礫層。粘性なし。締まりあり。
⑥d	2.5Y3/3	淡黄色	粘質砂層。粘性ややあり、締まりなし。
⑨a	N5/0	灰色	シルト層。黄橙色砂のブロックを含む。粘性強いが、締まり弱い。
⑨f	5Y4/2	灰オリーブ	砂礫層。粘性なし。締まり強い。
⑨g	N5/0	灰色	7.5Y7/2 シルト・灰白色	砂層。灰色シルトと灰白色砂層が互層。
⑩b	7.5Y5/1	灰白色	砂礫層。粘性なし、締まり強い。
⑪	10YR5/6	黄褐色	粘質土。粘性・締まり強い。
⑫	N7/10	灰白色	砂質粘質土。粘性あり、締まり強い。
⑦	N5/0	灰色	シルト層。水田土壌。粘性・締まりとも強い。



図版15　A地区・B地区平面図

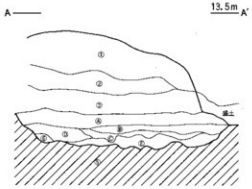




C地区 土層断面 土層名

①	2.5Y4/1	黄灰色
②a	2.5Y5/2	暗灰黄色
②b	2.5Y6/2	灰黄色
③a	10YR6/4	にぶい黄橙色
③b	10YR5/6	黄褐色
④a	10YR5/2	灰黄褐色
④β	10YR5/8	黄褐色
⑤a	10YR6/6	明黄褐色
⑤b	10YR6/4	にぶい黄橙色
⑥a	10YR4.5/1	褐灰色
⑥b	10YR4.5/1	褐灰色
⑦	10YR4/1	褐灰色
⑧	2.5Y4/1	黄灰色
⑦	2.5Y4/1	黄灰色−7.5Y3/2
Ⓐ	7.5YR4.5/1	褐灰色
Ⓑ	10YR5/6	黄褐色
Ⓒ	10YR5/1	褐灰色
Ⓓ	10YR4/1.5/1	褐灰色
Ⓔ	10YR4.5/1	褐灰色
Ⓕ	10YR5/3	にぶい黄褐色
⑩	10YR4.5/1	褐灰色
①	7.5YR6/1	褐灰色
⑥	10YR5/2	灰黄褐色
Ⓔ	7.5YR4.5/1	褐灰色
Ⓖ	7.5YR4/1	褐灰色
⑨	10YR4.5/1	褐灰色
⑩	7.5YR4.5/2	灰褐色
Ⓕ	7.5YR4/1	褐灰色

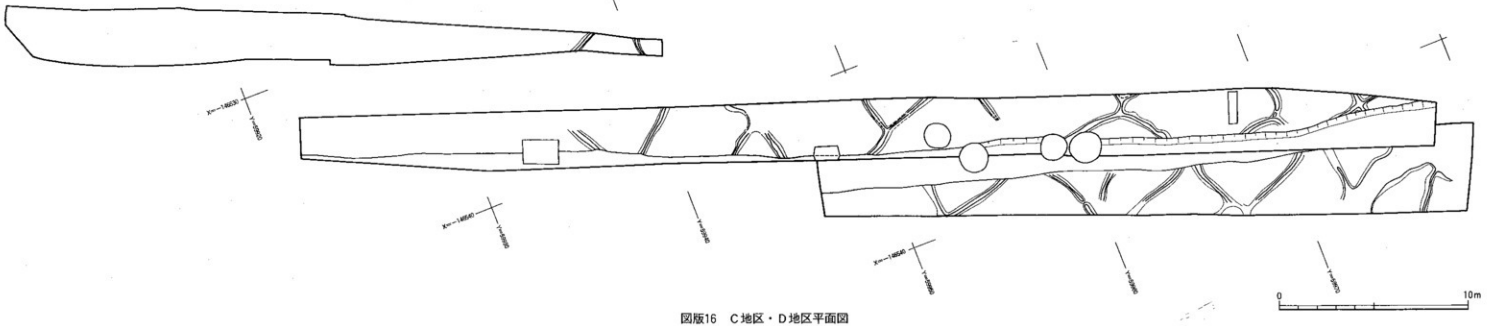
1 m
10m
0



D地区 中世溝 東端土層断面 土層名

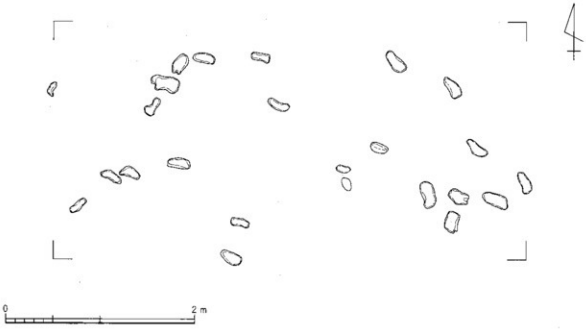
① 2.5Y4/1 黄灰色 極細粒砂～中礫少。畦道のための盛土。
② 2.5Y5/1 黄灰色 極細粒砂～礫粒砂。中礫を微量含む。鉄分含む。
③ 2.5Y6/1 黄灰色 極細粒砂～礫粒砂。中礫を微量含む。鉄分含む。
Ⓐ 2.5Y3/1 黒褐色 粗粒シルト～極細粒砂。中礫少量含む。粘質。鉄分・マンガン含む。
Ⓑ 2.5Y5/1 黄灰色 細粒砂～。砂質で軟らかい。鉄分・マンガン含む。
Ⓒ 2.5Y5/4 黄褐色 中粒砂。砂礫。Ⓒ層も混じる。軟らかい。
⑩ 2.5Y4/5 黄灰色 極細粒砂～細粒砂。やや粘質。鉄分・マンガン含む。
② 2.5Y4/1 灰色 粗粒シルト～極細粒砂。Ⓒ層もブロックで混じる。粘質。
① 5Y4/1 灰色 シルト。水田土壌。非常に粘質。鉄分・マンガン含む。

0
20m



図版16　C地区・D地区平面図

足跡拡大図1

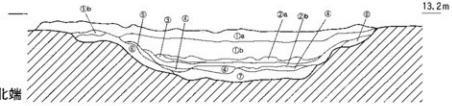


足跡拡大図2

図版17　足跡拡大図

SD−03南端

① 混砂黄褐色粘質土 (10YR5/6)
　灰色砂質土を15%含む。マンガン粒は3%で3cm層より幅めて少ない。粘性あり、締まり強い。
② 褐色粘質土 (10YR4/4)
　マンガン粒を主に上部に20%、明緑灰色粘質土 (7.5GY7/1) を15%含む。粘性・締まり強い。
③ 灰色砂質粘質土 (10Y6/1)
　微砂粒を主体とする粘質土で、粘性・締まり強い。
④ 灰色粘質土 (10Y6/1)
　微砂は下部に限定され10%含む。粘性・締まりの強い土。酸化により上半は黄褐色を帯びる。
⑤ 明黄褐色粘質土 (10YR6/8)
　微砂は全体的に10%含まれる。粘性・締まりの強い土。
⑥ 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/6)
　灰色の微砂15%、マンガン粒上部に5%含む。粘性・締まり強い。
⑦ 灰白色砂質土 (10Y7/1)
　明黄褐色粘質土2%、一辺2cm以下の河原礫2%含む。粘性なし、締まり強い。

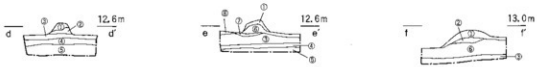


SD−04北端

①a 混砂灰色粘質土 (N6/0)
　微小な灰色砂と灰色粘質土が均等に混じっている。粘性・締まり強い。一辺2cm以下の礫を1%含む。
　上層より部分的に酸化により赤黄褐色化する。
①b 灰色砂質粘性土 (N6/0)
　一辺5cm前後の灰色砂ブロックと灰色粘質土のブロックが混じった土。粘性・締まり強い。
　一辺2cm以下の小石を3%含む。また上部に灰白色の微砂ブロック（一辺6cm前後）を少量含む。
②a 灰白色粘質土 (N7/0)
　一辺10～1mmの炭化物片を10%含むシルト層。粘性強く、締まり弱い。
②b 暗赤灰色粘質土 (2.5YR3/1)
　一辺10～1mmの炭化物片を15%含むシルト層。粘性強く、締まり弱い。
③ 混粘質土灰白色砂層 (7.5YY7/2)
　一辺3cm以下の灰色粘質土ブロックを10%含む。粘性・締まりなし。
④ 混砂灰色粘質土 (N5/0)
　微小な砂を2cm以下のブロック状に15%含む。粘性強く、締まり強い。
⑤ 灰白色砂層 (7.5YY7/2)
　粘性あるが、締まりなし。
⑥ 混砂灰色粘質土 (N5/0)
　灰白色砂25%含む粘質土。粘質強く、締まりあり。
⑦ 混粘質土灰白色砂層 (N7/0)
　灰色粘質土ブロックを20%含み、粘性弱く、締まりあり。酸化による黄褐色化が全体に細かく見られる。

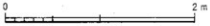
A地区畦畔土層断面

① 10YR4/1　褐灰（暗褐灰）V.F.S.～F.S.やや砂質。
② 2.5Y4/1　黄灰（暗褐灰）V.F.S.～F.S.、F.S.多くラミナ状に含み砂質に近い。
③ 2.5Y3/1　黒褐（黒褐）C.silt～V.F.S.、M.S.腐蝕含む。砂質。
④ 5Y4/1　灰（暗緑灰）silt 非常に粘質。Fe.Mn.多く含む。
⑤ 10YR4/1　褐灰（黒褐灰）V.F.S.～F.S.でF.S.をやや多く含み、ラミナ状のところもある。やや粘質。

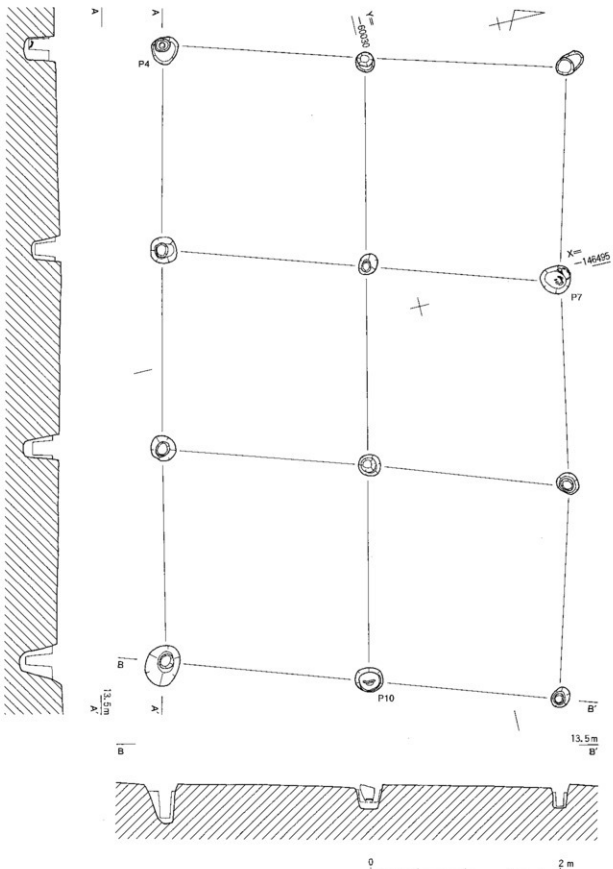


B地区畦畔土層断面

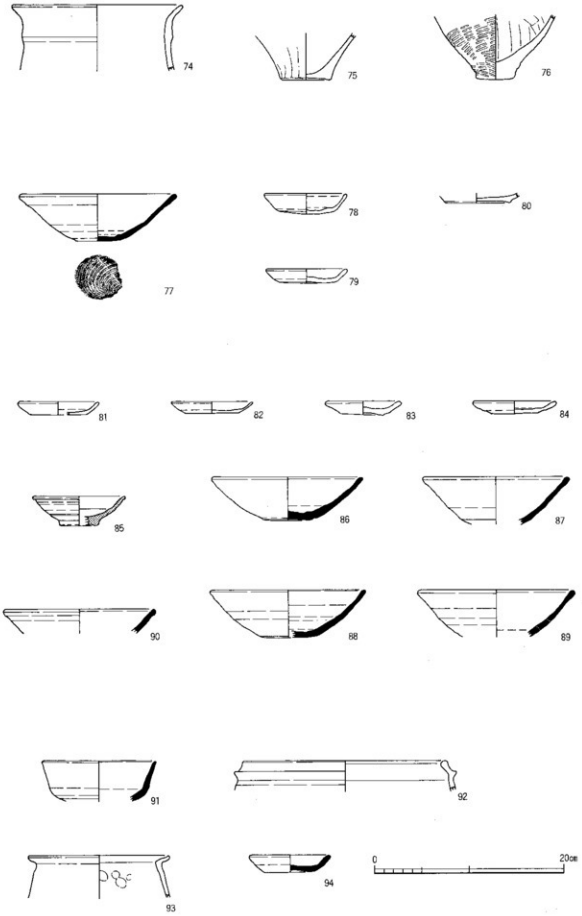
① 5Y4/1	灰（灰）	C.silt～V.F.S.、粘質V.F.S.多い。
② 2.5Y4/1	黄灰（灰）	C.silt 粘質。
③ 2.5Y4.5/1	黄灰（灰）	C.silt 粘質、水田土。
④ 10YR4/1	褐灰（灰褐）	C.silt～V.F.S.、F.S.まじり、粘質。
⑤ 5Y3.5/1	オリーブ黒（緑灰色）	silt 粘質。
⑥ 2.5Y5/1	黄灰	C.silt～V.F.S.粘質。
⑦ 2.5Y4/1	黄灰	C.silt 粘質。
⑧ 2.5Y5/1	黄灰	C.silt～V.F.S.粘質。



図版18　SD−03・04・水田畦畔土層断面図



図版19　SB－01平面・断面図



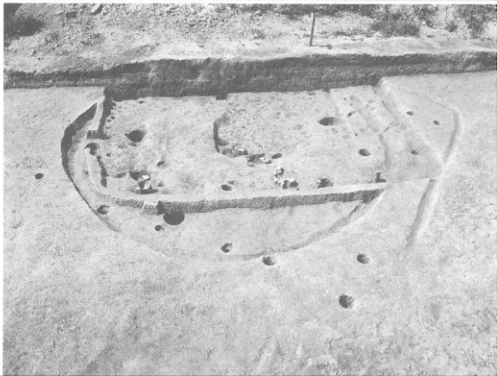
図版20　97年度出土遺物

丸塚遺跡遠景（南から）

丸塚遺跡遠景（北から）

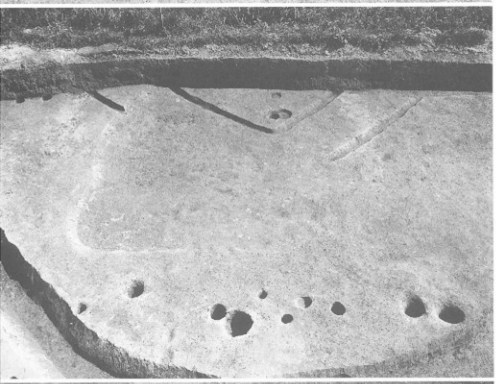
96年度調査区の全景（西から）

96年度調査区の全景（東から）



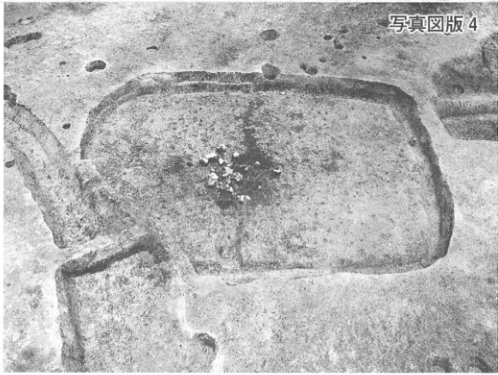
SH－1・2（南から）

SH－3・4（南から）



SH－5（北から）

SH－6（南から）



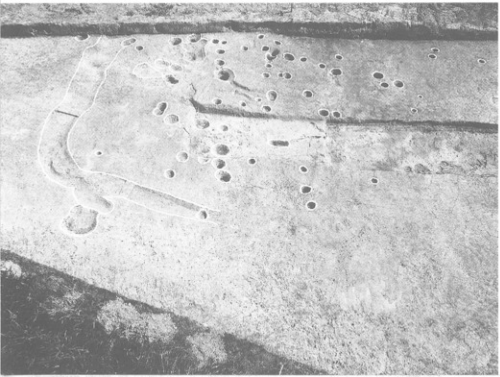
SH－７（南から）

SH－７（南から）

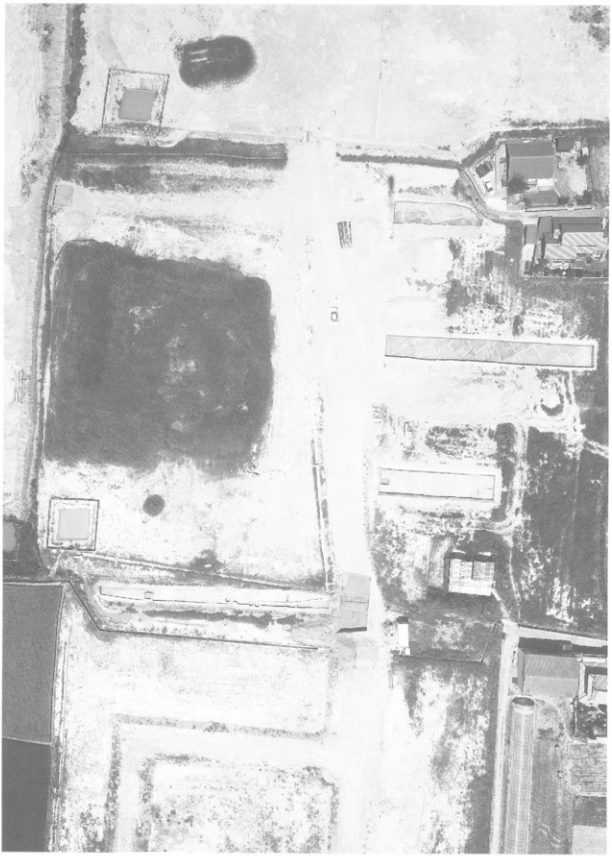
SH－７床面の土器群

A地区柱穴 1 内の土器出土状況

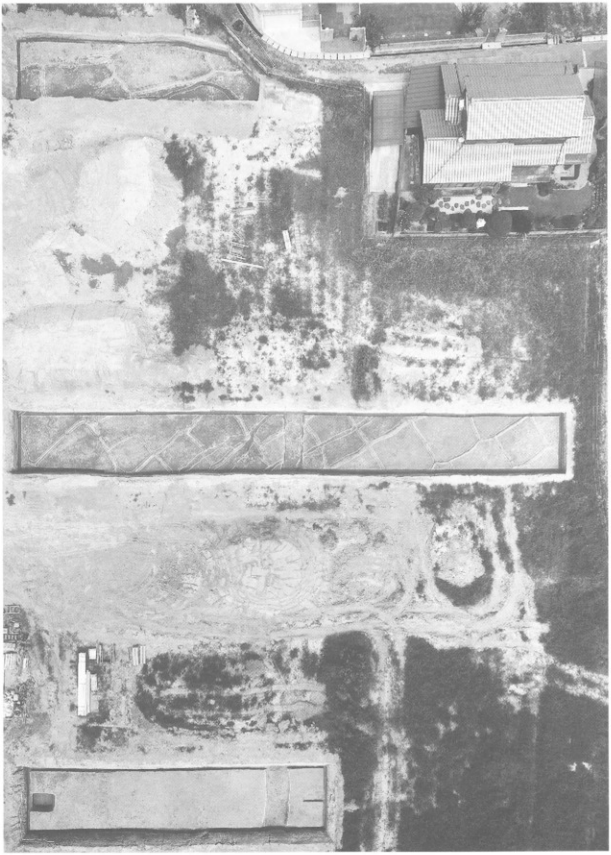
SB－ 1 全景（東から）



SB－ 4 全景（北から）

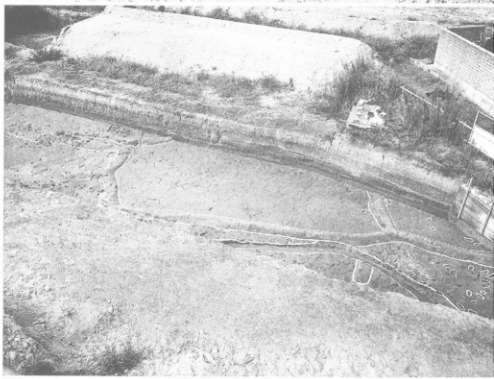


97年度調査区全景

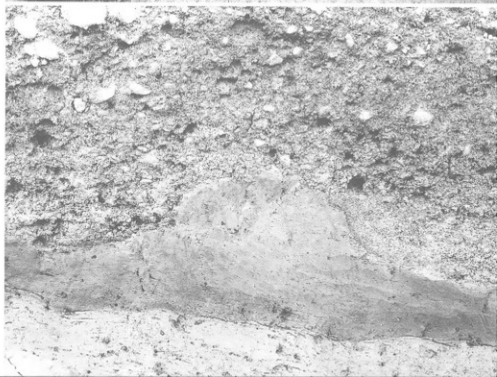


97年度Ａ～Ｃ地区全景

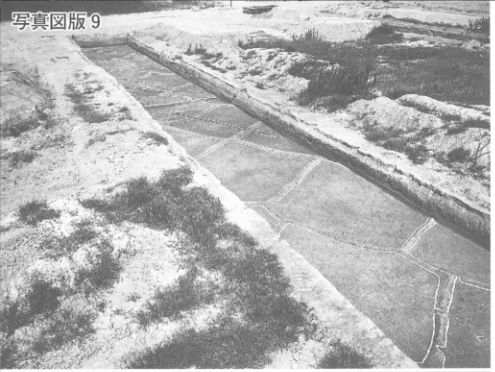
A地区水田（西から）



A地区中央部水田（南東から）

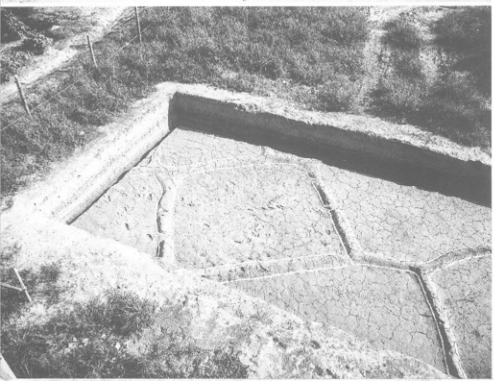


B地区水田畦畔断面（北から）

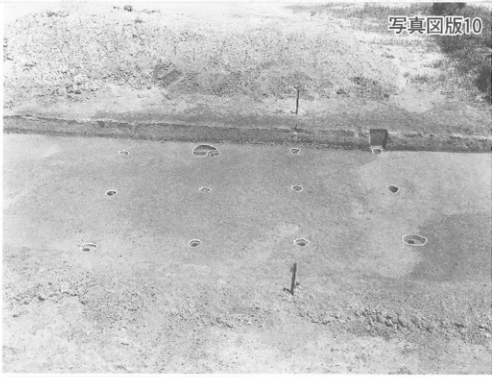


B地区水田（南東から）

B地区水田（西から）



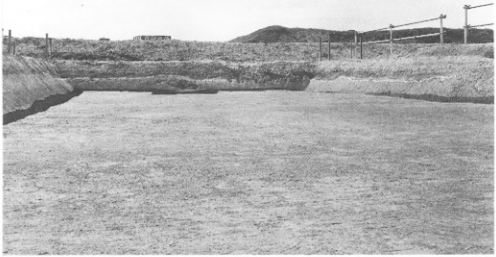
B地区東端水田（北西から）



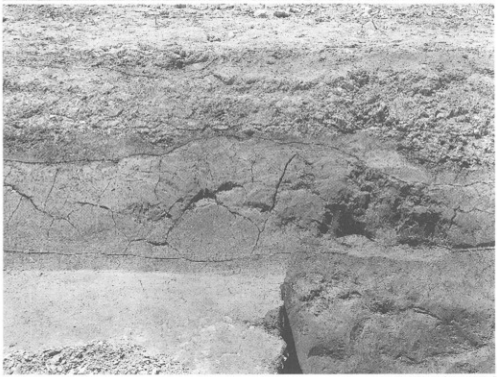
B地区SB－01（南から）

B地区SB－01（西から）

B地区SD－04（南から）

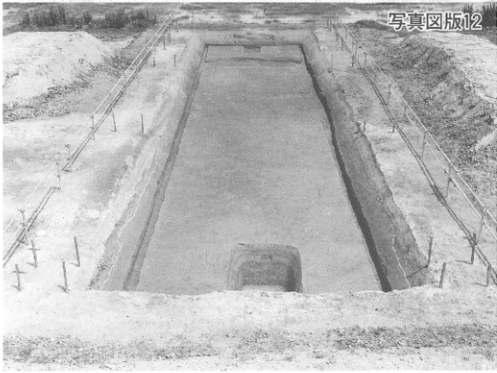


C地区水田面（白線部分・東から）

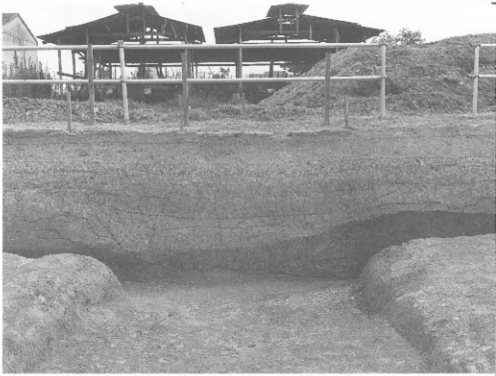


C地区水田畦畔土層断面（北から）

C地区水田畦畔土層断面（南から）



C地区全景（西から）



C地区SD一04断面（北から）

D地区全景（東から）

4

6

7

12

11

14

10

15

9

96年度出土の遺物 （1）

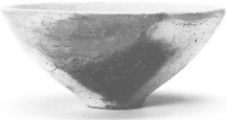
18

19

24

26

27

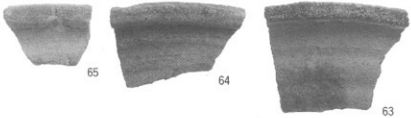


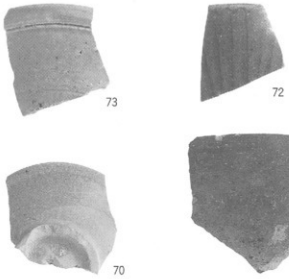
20

28

22

45


65
64
63


73
72
70

96年度出土の遺物 （3）

76

77

86

88

78

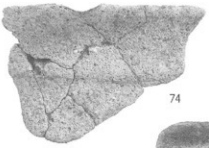
79

83

84

94

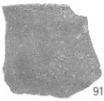
85


74

92

75

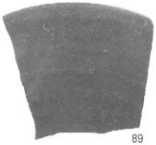
93


91

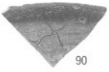
81

82

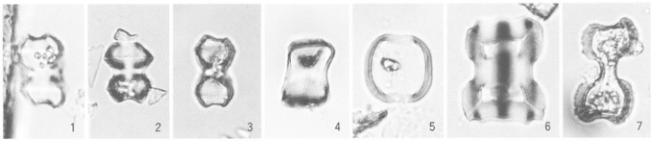
80

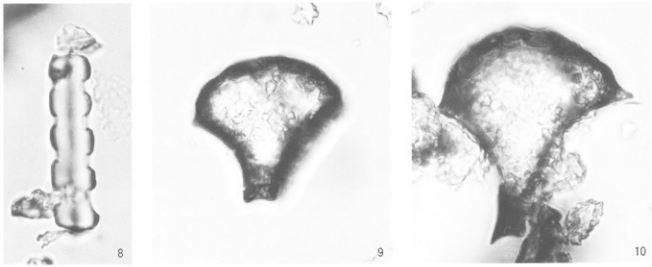

89

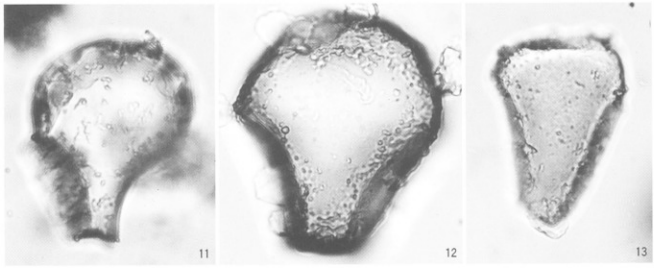
87


90

97年度出土の遺物







50μm

1．イネ属短細胞珪酸体（試料番号14）
2．イネ属短細胞珪酸体（試料番号16）
3．イネ属短細胞珪酸体（試料番号23）
4．タケ亜科短細胞珪酸体（試料番号８）
5．ヨシ属短細胞珪酸体（試料番号10）
6．コブナグサ属短細胞珪酸体（試料番号19）
7．ススキ属短細胞珪酸体（試料番号16）
8．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（試料番号11）
9．イネ属機動細胞珪酸体（試料番号９）
10．イネ属機動細胞珪酸体（試料番号11）
11．イネ属機動細胞珪酸体（試料番号16）
12．タケ亜科機動細胞珪酸体（試料番号８）
13．ウシクサ族機動扇型珪酸体（試料番号９）

プラントオパール分析試料

兵庫県文化財調査報告　第206冊

神戸国際港都建設丸塚特定土地区画整理事業にともなう

丸塚遺跡発掘調査報告書

平成12年3月31日　発　行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078)531－7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒652-0011 神戸市中央区下山手通5丁目1-10

印　刷　水山産業株式会社
〒653-0012 神戸市長田区二番町3丁目4-1

この冊子は、古紙100%の
再生紙を使用しています。